

愛媛大学教育学部

第 132 号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail : dosokai.ed.ehime@gmail.com



コロナ禍の中で



高橋 治郎

愛媛大学教育学部
同窓会会長

同窓会会員の皆様、このコロナ禍の中、どうお過ごしでしょうか。昨年からのコロナで振り回され、世界中が大混乱しましたが、いまだに収束せず、ワクチン接種の遅れている我が国は新型コロナウイルスの感染拡大が続く、現在第四波の真只中にいます。この原稿を何時書き出すか、迷いましたが、六十五歳以上の高齢者にワクチン接種の予約が始まったのを受け、筆を執ることにしました。(もともと同窓会報の印刷に間に合わないからですが……)

ここ一年半、何かに付け「がまん、ガマン、我慢」を強いられ、入学式や卒業式、授業や部活、修学旅行をはじめ各種学校行事、旅行や歓送迎会、冠婚葬祭、町内会の各種行事、等々、多くのことが

中止や延期、あるいは規模を縮小して行わざるを得ませんでした。この「我慢」もまだまだ続きそうです。いつまで「我慢」をすればいいのか、先が見えずに困惑するばかりです。それから、外出時にマスクをしなければならないのもこれからの夏場、苦痛です。記念に取ってある、国からのプレゼントの口を覆う面積の小さいマスクでしのごうかと考えています。

さて、このコロナ禍の中で再認識したことが三つあります。その一として、「一文おしみの百失い」。現在、大学での研究は、お金になるものでないと研究費が付きません。かつてのように好きな研究ができなくなっています。研究は研究者としての興味・関心、好奇心、知的欲求が原動力となり、進められます。夏目漱石や正岡子規、ピカソや平山郁夫、小惑星や銀河、植物や植物化石、こうした人や物の研究はお金になりませんので、科学研究費をはじめ外部資金は先ず付きません。ですから、平時にはお金にならない未知のウイルスやワクチン、感染症対策、危機管理等々の研究が手薄となり、このコロナ禍に必要とされる知識がないわけです。その結果、国産ワク

チンが作れないのです。海外から買い求めなければならず、アメリカに行った首相がアメリカからアメリカの製薬会社にコロナワクチンを日本に回してくれるよう電話したというのです。この体たらくで「科学・技術立国」を謳っているのですから……。「目先の利益を追求する研究だけではなく、様々な研究ができる社会でなければならぬ」ということです。

その二、「無用の用」。「ゆとり教育」だ、「働き方改革」だ、といいながら「ゆとり」も「余裕」も「自由」もなく、その一方、何事にも「無駄」をなくし「効率」化が大切だとばかり、病院にもスリム化と効率化を押し進めた結果、この非常時にコロナ感染者を受け入れる病床がなく、また、医療従事者が不足し、おまけに過酷な勤務で医療崩壊目前です。病院に行けずに亡くなる人や医療を受けられず苦しんでいる人が大勢います。高校の時、「漢文」で「無用の用」の一節を学習しましたが、昔から受け継がれてきた考えは普遍性があり、何時の世でも大切なことだと思えます。

その三、「米百俵の精神」。教育にお金を掛けなくなる一方、教育や教科書、教員に注文をこれでもか、これでもかと押しつけてきます。様々なことを教員に押しつけ、勤務時間が膨れ上がり、その結果「教員はブラックだ」と敬遠され、教員志望者は年々減ってきています。さらに、今日の教員養成学部では、「教科」にさく授業時間が

減り、「教職」関係の授業時間数が増えています。昨今の学生は、高校では大学受験に必要な勉強しかしていません。ですから、それを補う意味でのオールラウンドな教科の学習が大学で必要なのです……。「教科書を教える」のではなく「教科書で教える」ことのできる教員を育てたいものです。その一方、国にはアルバイトをしなくとも昔のような奨学金(教員になり決められた年数を勤めれば返さなくてよい)で勉強に専念できる環境を再構築してもらいたいものです。また、教師を増員し、週五日勤務で勤務時間は八時間を守り、部活等で時間外に指導に当たらなくてはならないのであれば、それ専門の教員を雇うなりすべきです。とにかく、教員の働く環境をよくしていかなければ我が国の将来はないと思います。

この四月からGIGAスクール元年ということで児童生徒一人一台の端末が整備されることになりました。こうした整備の遅れている我が国ですが何とか動き出しました。大学ではコロナ禍で、対面授業(通常の授業)ができずオンライン授業(遠隔授業)を多くやっていますが、オンライン授業を受ける環境下にはない学生もいます。巣籠もりをしながら「教育にお金を掛けないとコロナ禍を収束させることもできず、我が国は滅ぶ」と思いました。どうぞ、お元気でこのコロナ禍を乗り越えましょう。今後とも同窓会運営にご協力ください。

目次

表紙

「平野のツツジ」…………… 相原 利雄
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
「コロナ禍の中で」…………… (1)

心響

「合言葉は⑬『夢』『知恵』『元氣』」
四国中央市・三島東中学校校長 野村 浩

研究室紹介

教育学部家政教育講座食品栄養学研究室
岡本 威明 研究室

職場だより

子どもたちに感謝
四国中央市・豊岡小教諭 伊藤 絢香

先生おかえり

西条市・玉津小教諭 安原 周平

今治市・宮窪小教諭

山川 義弘

どうして教員になりたいのか

松山市・北条南中教諭 杉野 正典

教師の『本気』が生徒の『やる気』を生む

東温市・川内中教諭 片山 祐貴

自分らしく

内子町・五十崎中教諭 永尾 隼人

リフレッシュ2号館紹介

学部トピックス…………… (11)

「四国ESDフォーラム2021日本ESD学会第2回四国地方研究会」を開催しました

今治市教育委員会及び上島町教育委員会と連携協力事業の調印を行いました

合言葉は

「夢」「知恵」「元氣」

四国中央市立

三島東中学校長

野村 浩

(昭五九卒)

数年前、自分の定年退職のことが脳裏をよぎる時期がありました。また、これと言った功績もない、趣味もない、そんな自分の退職後の人生に不安を感じながらも「まあ、何とかなるさ。」と根拠のない自信を言い聞かせていた時期もありました。つまり、自分の人生に行きづまりを感じていたのです。

そんな折、ある勉強会への誘いがありました。その誘いは強制されたものではありませんでした。勉強したい。「行ってみよう。勉強したい。」という気持ちが生じたのです。あれから数年、ここまで自分を奮い立たせていただけとは、そのときには期待もしていま

勉強会を主催する方の、多くの著書には「夢」「知恵」「元氣」という言葉が合言葉のように出てきます。「志」という言葉もよく使われています。そして『夢出せ！知恵出せ！元氣出せ！』という著書には、次のようなことが綴られています。

です。人物になるには、自らが修養し続けることが大事です。そのためには秘訣があります。

第一は、優れた人物に学ぶことです。古今東西を通じて、立派な人物を見逃さない、できるだけ人物に親しく接して、感化を受けることです。

次に読書です。広く世間を知るとともに、できるだけ偉大な人物の魂が込められている文献や書物に多く接することです。

その次に大切なことが実践です。自らが人物を目指すための条件は、臆することなく勇敢に、そして自分というものを空にして、あらゆる人生の経験を嘗め尽くす覚悟です……とあります。

また、松下幸之助の『自分には自分に与えられた道がある 天与の尊い道がある』どんな道かは知らないが、他人には歩めない。自分しか歩めない。二度と歩めぬかけがえのない道」という言葉を紹介し、次のように綴っています。

心響



でいる所もあります。そのような一見つらいように感じられる道に差し掛かったときには、私たちが気を付けなければならぬ大切なことがあります。

それは、心の中にづらい思いが生まれてくるのを、道のせいだけにしてはいけないということなのです。道は、誰に対しても同じように準備をされたものだからです。往々にして、道が悪いから、自分はこんなに苦労しているのだと、誰もが思いがちです。しかし、よく考えてみると、その人の心がその人を苦しめているのです。例えば、同じような坂道を歩いたとしても、「こんなにとんでもない坂道を歩かせやがって。」と怒る人がいれば、その一方で、全く同じ道を歩いているのに、汗を拭きながら、その路傍に咲いている小さな一輪の花に天地自然の豊かな営みを感じて、喜びを感じながら歩く人もいます。

結局、良いことも悪いことも、突き詰めれば、私たちの心の問題であり、道のせいではないのです。だから、自分の心の中がどうであるかというのを観察しながら、この人生を見つめていかなければいけないのです……と。

また、佐藤一斎の『少くして学べば壮にして為すあり 壮にして学べば老いて衰えず 老いて学べば死して朽ちず』という言葉も紹介しています。これは「三学戒」と呼ばれ、小泉元総理大臣が国会答弁中に引用されるなど、よく知られた言葉であり、次のように綴っています。

若い頃にきちんと勉強をした人は、壮年期になったとき、ちょうど人生の真つ盛りの頃に、世間が

放っておかないものです。為すべき仕事は自然に与えられる人生になります。壮年期によく学んだ人は、老年期がやってきても心が活発に働いているため、精神的にも肉体的にもなかなか衰えがやってきました。そして、老年期によく学んだ人は、その生きざら(19)や考え方が多くの人に慕われ、その命を終えた後も、その人の生きた足跡が、長く人々の心の中に生き続けて朽ちることがないでしょう……と。

その他にも、吉田松陰、勝海舟、坂村真民、土光敏夫、西郷隆盛、安岡正篤などの名言を、スーパーマンになるための「志」の言葉として紹介し、込められた思いについて、綴っています。

私は、このような出会いにより『一生勉強』という言葉の持つ深い意味が、やっと分かるようになってきました。また、定年退職は、長い人生の中の一つの点でしかないと考えるようにもなりました。今では、定年退職後の不安は全くなく、「夢」「知恵」「元氣」を人生の合言葉にして、自分自身の一方通行の人生を、前へ前へと進み続けようと決意しています。行きづまり感どころか、広くどこまでも続いている、白いカンバスのような道が見えるようになってきています。

私は、本校の教育目標を『夢を描き 知恵を磨き 元氣を奮う生徒の育成』としました。これは、これからの私自身の生き方の目標でもあります。高齢となり、世の中の組織から解き放たれたとき、その生き様の本物さや真剣さの中に、人間の真価が見えてくるのではないかと思います。

部活動紹介……………(14)

愛媛大学書道部

先輩を偲ぶ……………(15)

「あしあと(5)」先輩たちのあしあと

同窓会事務局

会員の声……………(17)

・「春や昔」井手窪 理

・「英訳『教行信証』と私の祈り」吉原 宏文

校友会ニュース

ホームカミングデイ案内……………(21)

放送大学・ミュージアム案内……………(22)

同窓会支部長会報告……………(23)

役員表……………(24)

事業・決算報告……………(25)

同窓会会則……………(26)

支部活動支援金交付要綱……………(27)

敬弔・寄付者名・受賞者……………(28)

裏表紙……………(29)

表紙作品について

「平野のツツジ」

相原 利雄
(昭二六卒)

【表紙説明】

表紙の写真は、大洲の平野のツツジです。早朝、誰も足を踏み入れていない静寂な風景をカメラにおさめました。

研究室紹介



愛媛大学教育学部

家政教育講座食品栄養学研究室



教授 岡本 威明 先生

自己紹介

私は、平成十二年に愛媛大学大学院農学研究科を修了し、その後、九州大学大学院に進学し学位を取得しました。その後、米国マサチューセッツ大学や奈良県立医科大学にて博士研究員として勤務し、平成十七年に川崎医科大学学生化学教室に助手として着任しました。その後ご縁がありまして、平成二十三年に愛媛大学教育学部家政教育講座の講師として採用されました。初めて一人暮らしを経験した愛媛県松山市に戻り、母校で教員として教育・研究に携わっていることを非常に嬉しく思っています。また、平成二十四年には、初めて自分のラボ（食品栄養学研

究室）を立ち上げることができました。時が経つのは早いもので、愛媛大学教員生活は、今年で十年目を迎えます。

家政教育講座の教員

着任した当時、曲田清維先生（住居）、宇高順子先生（調理）、金子省子先生（保育）、野中美津枝先生（消費者教育）、藤田昌子先生（生活経営、真鍋郁代先生（被服）、および私（食品栄養）の七名が在職していました。その後、定年退職、転出、採用等で、四名の教員が異動し、現在は、金子省子先生、藤田昌子先生、真鍋郁代先生、竹下浩子先生（消費者教育）ら合わせて五名で講座を運営しております。

す。この十年間、後任人事は一回しか実施できておらず、教員数は減少の一途を辿っており、現在もなお着任当時と変わらず、私が一番の若手教員となっています。さらに、おこがましい話ですが、宇高先生がご退職された二年前より、中学・高校の家庭科教員のお力をかりつつ私が調理実習系科目を担当することとなり、なんとか食物学領域の教育の質を維持しているところでもあります。

研究内容

愛媛大学着任以降は、①食品の機能性 ②食品の安全性評価 ③家庭科教育に活用できる教材開発 ④未利用資源の有効活用、に関する研究を学生らとともに行ってきました。①の食品の機能性に関する研究では、花粉症などの一型アレルギーを抑制する食品成分の探索とそのメカニズムの解明を動物細胞や実験動物（マウス等）を用いて行っています。これまでに、牛乳カゼイン由来のイミダゾールトリペプチド（H A Q）、ハマアザミ葉に含有するシルシマリチン、シークワーサー果皮・葉に含有するノビレチン等に抗アレルギー効果があることを見出してきました。②の食品の安全性評価に関する研究では、必須アミノ酸の

一種であるトリプトファンのサブリメント摂取による過去の事故例に着眼し、ヒト好酸球やそれ由来の細胞株（EoL-3）を用いた健康食品の安全性評価系の確立を目指してきました。本研究に三年間携わって頂きました田頭歩佳さん（研究室第一期生）は、現在、新居浜工業高等学校生物応用化学科の助教として活躍されています。③の家庭科教育における教材開発に関しては、主として、学校教員養成課程（家政教育専修・専攻）の学生らとともに実施してきました。これまでに、各種ビタミン類の諸性質・卵の乳化性・食品に付着している食中毒菌の可視化を目的とした実験教材の開発、さらには三大栄養素を題材とした授業をする時に活用できる模型や実験教材の開発・実践も行ってきました。本研究に携わった学生の多くが、現在、中学・高校の家庭科教員として活躍しています。④の未利用資源の有効活用に関する研究では、柑橘と魚に焦点をあてて、現在、大学生・高校生・食品製造企業と連携し、精力的に取り組んでいるところです。

産学連携による商品開発

私は、学生時代より食品の機能性に関する研究を行ってきました

が、愛媛大学着任後は、研究成果を地域の方々へ還元すること、そして食品成分の機能性を活かした商品開発に関しても意識するようになりました。商品開発に関する具体的な活動として二つ紹介します。一つ目は、平成三十年度から開始しました、(有)旬美との共同研究を通じて卵殻粉と白キクラゲ粉末を含む新規カルシウム強化魚肉練り製品を開発し、その研究成果を用いて特許出願を果たしました。白キクラゲはビタミンDを多く含むことからカルシウムの体内吸収率の増大が期待されます。また、本特許出願技術を用い、(株)八水蒲鉾との共同研究を遂行することで、「カリカリ梅としそ入りのさっぱりおつまみスティック天」の開発に成功し、令和三年四月に上市されました。愛媛大学着任後、初めての産学連携商品となりました。



企業との共同研究成果物

二つ目は、抗アレルギー成分として知られるノビレチンを多く含む香酸柑橘シークワーサーの葉に着眼し、その葉パウダーを用いたクッキー、カップケーキ、チョコレート、ベーグル、チキン南蛮のソースなどを開発し、松山市内のカフェにて販売を行いました。本商品開発および販売においては、多くの大学生や高校生ならびに高校教員に手伝って頂き非常に感謝致しております。

高大連携活動

愛媛大学着任以降、愛媛大学附属高校、松山南高校、松山東高校との課題研究指導を通して積極的に高大連携を図ってきました。特に松山東高校とは、平成二十六年以降現在まで、スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業ならびに、地域との協働による高等学校教育改革推進（GL）事業に基づく課題研究において、百十四名の指導に携わってきました。その中で昨年五月から今年三月にかけて高校生四名とともに、シークワーサー果肉および果皮を用いた世界初のマーマレードの作成に挑戦しました。そのマーマレードを、八幡浜市で開催された第三回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会

（高校生の部）に出品したところ、見事銀賞を受賞しました。現在、来年の大会にて金賞受賞を目指して、生徒らとともにシークワーサーマーマレードをブラッシュアップするとともに、松山東高校・愛媛大学教育学部・JAPANAマーマレード協会の三機関協働によるシークワーサーマーマレードの商品化に向けて頑張っています。本活動を通して、高校生や大学生に対して、地域マネジメント力（課題発見力・企画立案力・協働実践力）の供与や、郷土における課題解決に貢献する志を持つ人材としての育成、ならびにグローバルな視点を持ち郷土の魅力を世界に発信し、持続可能な社会の発展に貢献する人材の育成に繋がればと期待しています。



高校生とのマーマレードづくり

研究と家政教育講座の魅力

私が取り組んでいる研究の魅力

は、食品の機能性を細胞や動物を用いた基礎研究により解明することだけでなく、さらに調理や加工という形で応用できるところにあります。そして最大の魅力は、生産者や食品企業との連携によって機能性食品の開発へと発展が可能などところ。また、その機能性食品を発売できた暁には非常に心地よい達成感が味わえます。さらに、家政教育講座には、理科教育講座を含めると、細胞培養を可能とする設備や細胞の生化学・免疫学的反応を評価する実験設備が備わっています。それらに加え、調理加工研究を実践できる調理室を完備しているところも大きな魅力です。



調理の楽しさを感じて

研究室配属学生

食品栄養学研究室を立ち上げて以来、二十八名の学生（生活環境コース十六名、中等家政教育専

修・専攻十名、小学校サブコース二名）とともに研究を行い、数多くの新発見と業績を生み出すことができました。これも偏に学生さんのおかげだと思っています。

現在、中学や高校の家庭科教員は、ただ単に栄養素や調理法を教えるのではなく、理論的な裏付けのある指導が求められていると考えています。ここで紹介したような研究を実践することで、学生が確かな専門性を有する家庭科教員へと成長して頂けたらと願っています。

同窓会の開催

平成二十九年二月に、卒業生と在学生も含めて第一回同窓会を開催し、十名の方々が参加してくれました。久しぶりに卒業生の元気の姿をみることで、また各々の職場で活躍している様子も嬉しく聞かせて頂きました。研究室同窓会は、オリンピック同様四年ごとに開催するルールにしておりましてので、今年が第二回同窓会開催の年です。新型コロナウイルス感染が一日でも早く収束し、また皆さんと同窓会が開催できることを心待ちにしております。また、愛媛大学教育学部家庭科同窓会におきましても、来年、総会ならびに親睦会が開催できますことを楽しみにしております。

しみにしております。



第1回同窓会の様子(2017.2.4)

最後に

これまで紹介してきた教育・研究活動は、新たな機能性食品の開発、柑橘未利用資源の有効活用、魚食の推進・普及、郷土料理の継承の面において非常に有意義であると考えています。今後も愛媛県内における地場産業の振興・発展に寄与できたらと思っています。今後二十年程度、教員人生を残しておりますが、「爾今」の精神で愛媛大学教育学部における学生教育に誠心誠意努めてまいります。



参考 家政教育専攻のHPのQRコード

職場だより



子どもたちに感謝



四国中央市
豊岡小教諭
伊藤 絢香
(令三卒)

私が小学校教員を目指した理由は、人を喜ばせられる子どもたちを育てたいと思ったからです。子どもたちは個性もさまざまであり、能力も違います。人を喜ばせる方法は一人一人違います。しかし、友達を大切にしよう、社会のために何かしたいと誰かのために生きようと思う心はみんな持っていると思います。子どもたちの持っている思いや能力を引き出してあげられる指導ができる教師になりたいです。

私は学生のとき、学校に行くことが楽しいと当たり前のよう thinking 思っていました。しかし、私が高校生 のとき、妹が不登校になり、学校に行きたくないと苦しんでいた時期がありました。理由はわかりませんが、ただただそんな妹の姿を見て、私も辛かったことを覚えています。どうしたら、誰もが喜んで学校生活を送れるだろうかと考えたこともありまし た。子どもたちは地域の宝とよく

言われますが、私も子どもたちはやがて大きく成長し、より良い地域社会の形成を担っていく存在であり、一人一人が希望であると考えています。子どもたちが友達と楽しく勉強や遊びをしながら、成長していくためには、教師の存在はとても大きいと思います。教師を志しました。また、大学生のときに

フイリピンに一年間、ボランティアに行った経験があります。日本では学校に行つて勉強することが当たり前ですが、フイリピンは貧しい家庭が多く、勉強することも困難で生きていくのも精一杯な現状でした。私が参加したボランティアでは、貧しくて学校に行けない子どもたちのために、日本の絵本を英語に訳して読み聞かせをしました。絵本での教育活動の補助をしました。現地の大学生とも関わる機会がありました。彼らは自分のためではなく自分が立派になつて働くことで家族のためになると思い、必死に勉強をしていました。貧しさゆえに勉強できない子どもたちと関わりながら感じる悲しみや家族のために勉強する大学生の姿を心の中に留め、少しでも地域や世界のために貢献したいといつか思えるような子どもたちを育てたいと思うようになりました。そんな大きな理想を心に秘めて、新しい地での初めての教員生活が始まりました。漠然とした不安を抱えながら、子どもたちと出

会つて早くも二ヶ月が経とうとしています。大学生活で学んできたことや実習で学んだことを思い出し、周りの先生方からアドバイスをいただきながら、まずは自分でできることを精一杯頑張ろうと毎日、試行錯誤しながら取り組んでいます。

まだ、教師になつて二カ月の経験しかありませんが、子どもたちの成長とともに自分の成長も感じられることが教師としての一つの喜びだと感じています。私は、教師になるまで、人を叱つた経験がほとんどなく、周りを気にしてしまふ性格でもあったため周りの人や兄弟姉妹を見て叱られることもほとんどなく生きてきました。しかし、子どもたちの性格は様々で一回指導したら理解できる子どももいれば、何回言つても同じことを繰り返すような子どもなど個人差があります。どのように指導すると心に響くのか、どうしたらできないことができるようになるのか、その子どもたちと毎日関わりながら自分に合った声掛けの仕方を工夫しているところです。教師として、毎日、子どもたち一人一人を見つめ、指導すること、今まで全くできなかったことが少しずつできるようになり、子どもたちと共に成長できる仕事であると感じています。

二つ目の教師の喜びは、子どもたちと一緒に勉強したり、遊んだり、話したりすることで元気をもらえることです。私が一生懸命準備した授業に喜んで勉強に向き合ってくれることもあれば、つまらなさそうにしている姿が見られることもあります。しかし、子どもたちと同じ目線に立ち、子どもたちの気持ちになつて授業を考えながら準備をしたときほど、子どもたちが喜んでくれるのだと感じています。自分もわくわくしながら授業準備を進めることができるし、子どもたちが楽しく勉強をしている姿もみることができ、やりがいを感じています。休み時間は、子どもたちと一緒に遊ぶよう心掛けています。外での遊びは正直、疲れますが、童心に返つて一緒に遊び、子どもたちの笑顔を見ると元気になります。

今は、まだ始まったばかりで目の前のことに必死ですが、一つでも多く喜びを感じながら子どもたちのために私も成長していきたいと思っています。

教育に限界はなく、子どもたちのためにしてあげたいことはいっぱいあるけれど、力と時間が足りず、できないことが多くあり葛藤を感じます。今は二十六人の比較的少人数の学級担任をしています。一人一人の話をゆっくり聞いてあげたいし、わからない問題や間違つた問題を丁寧に教えてあげたいし、一緒に楽しく遊びや運動もしたくてたまりません。また、授業においても教材研究に時間をかけて取り組み、勉強が苦手な子どもたちでも楽しいと感じられる授業を行いたいです。毎日、様々な仕事があり、十分な指導も届かず、先輩の先生方のように上手くいけません。しかし、昨日より今日、一つでも何かしてあげられたことはないか、一つでも成長できたことはないかと振り返りながら、小さな積み重ねを大切にしています。



四年目を迎えて



西条市
玉津小教諭
安原 周平
(平三〇卒)



私が教員を目指そうと思ったきっかけは、小学校六年生で担任をしていたいただいた先生との出会いです。当時の私は、とても活動的な子どもでした。授業中は、氣になることや思いついたことをすぐに発言するタイプでしたが、先生は、私の発言を上手に受け止めてくださり、楽しい授業をしてくださいました。また、自分なりに頑張っているのになかなか進まないときは、真剣に私の話を聞いてくださいました。子どもなりに、この人は自分のことを認めてくれていてと感じました。そのときに漠然とではありますが、教員という職業に興味を持ちました。おいしい野菜を作るための勉強をしていたいと考えた時期もありましたが、愛媛大学への入学を機に教員になるという決意を新たにし、現在、愛媛県で教員として勤めています。

とを考え、積極的に実践しているところと頑張っているところとです。ここで、同窓会報への寄稿を機に自分の三年間を振り返ってみたいと思います。

一年目、生まれ育った東温市を離れ、隣の西条市で勤務することになりました。初めての一人暮らしということもあり、少しの期待とたくさんの不安が始まった新生活でした。しかし、温かく迎えてくださった先生方のおかげで、不安はすぐになくなりました。一年目は、五年生を担当させていただきました。とてもパワフルな学年で、運動会や自然の家、音楽フェスティバル、総合的な学習の時間の米づくりなど、様々な場面で子どもたちは大活躍しました。私も、体験を重ねるごとに成長する子どもたちを見るのがとても楽しかったです。そんな中、自分は、日々の教材研究や、初任者研修などに奮闘していました。見通しが全く持てず、要領が悪い私は、上手に時間を使うことができないので、周りの先生方に助けてもらうばかりでした。今振り返ってみると、もつとできることがあったのではないかと思います。

二年目には二年生を担当させていただきました。高学年から低学年を担当することになり、初めは子どもの様子が全然違うことに戸惑いました。しかし、どの学年を担当しても誠意を持って子どもに接することで、信頼感を高めることができるということに気がきました。校務分掌では、交通安全主任を任せられました。集団下校や登校校長会など、自分が中心になって学校全体の活動をするので、全体の見通しを持って指導することを意識するようになりました。

その中で学んだことは、どのような子どもを育てたいのかという目標を明確にして、活動計画を作ることが大切だということです。分からないこと、できないことに自分で気付くようになり、自分なりに考えて仕事に取り組めるようになったと感じます。

三年目は、まさかの一年生担任。一年目は高学年、二年目は低学年の担任だったので、次は中学年を担当するのかなと考えていたのですが、続けて低学年を担当させていただきました。ただ、続けて低学年を担当させていただくことになりました。私の担当学年を知った同期の先生方はびっくりしていました。小学校生活のスタートを任せられるのが自分ではいいのだろうかと思ひながらも、四月がスタートしました。始めてみると、学校生活のルールや学習の仕方など、今まではできて当たり前だと思っていたことを、担任の先生が丁寧に指導してくださっていたのだということに気がきました。できないことがたくさんあるということでは、できることがどんどん増えていくということもあり、毎日のように新しい発見や成長を見せてくれる子どもたちを見て、自分も頑張らなければいけないと思いました。

さて、今年、一年目と同じ五年生を担当させていただいています。今年の五年生も元気いっぱい、毎日子どもたちにエネルギーをもらっています。一年目に見通しを持って指導することができなかったことを振り返り、毎日の指導に生かしていきたいと思っています。まだ、玉津小学校の子どもは、転任してきた私のことをあまり知りません。そこで、少しでも早く私のことを知ってもらうために、校門での挨拶運動に参加しています。まだ始まって一か月ですが、名前を呼んで挨拶をしてくれる子どもが増えてきました。今後、これまでの経験を生かして自分ができることを考え、積極的に実践したいと思っています。

この三年間の経験を通して、私が今後大事にしたいと感じたことが二つあります。それは、「きく」と「こたえる」ということです。子どもたちは、毎日いろいろなことを私に話してくれます。これから仲良くになりたいと思っている友達の話、昨日の晩ご飯が原因でお姉さんとけんかしてしまった話、ドッジボールで活躍するため毎晩自主練習をしてる話、どれも何気ない日常の会話ですが、子どもたちにとっては大事なことです。自分が頑張っていること、悩んでいることを、子どもが一生懸命話してくれたとき、それを私がしっかりと「聴くこと」で、信頼関係を築くことができます。また、授業の中では「訊くこと」も大事にしています。発言をしている子どもに、「どうしてそう考えたの?」と質問したり、「他の人はどう思う?」と学級全体に問いかけたりすると、別の視点から考えた意見が出てきて対話が生まれ、一人一人の考えが深まります。

二つ目の「こたえる」には、「答える」と「応える」という気持ちがあります。子どもたちの質問や疑問に「答える」ことが重要です。次に、私が大事にしているのは、子どもたちの気持ちや行動に「応える」ということです。子どもたちは学級の中で、様々な思いを持って生活しています。私は、その一つ一つに自分がどれだけ応えられるかということに常に考えるようにしています。一人一人の要望や考えをすべて実現することはとても難しいですが、自分が持っている信念を子どもたちに伝え、理解してもらおうことが最初の一步なのではないかと思っています。そうすることによって一人一人が輝ける学級を作りたいと思っています。

あるとき、困っている私に、学年主任の先生がアドバイスをくださいました。そのお礼に、「いづかご恩を返します。」と言ったら、学年主任の先生はこんな言葉を返してくださいました。「先輩として当たり前のことをしただけだから、私に返す必要はないですよ。私も先輩方にたくさん助けてもらいました。次は、困っている先生を見つけたら、安原先生がさり気なく助けてあげてくださいね。」と。教員生活四年目、まだまだ学ばなければならぬことがたくさんありますが、これまでの経験を生かして自分ができることを考え、積極的に実践していくことで、先輩方から教わったことを後輩に伝えたいと思います。



先生おかえり



今治市
宮窪小教諭
山川 義弘
(平三〇卒)

教師生活一年目が終わろうとしていた三年前の三月、宮窪小学校への異動が決まった。

宮窪小学校に着任して、私は運命を感じた。宮窪小学校の近くにある山、「カレイ山」。村上海賊の居城である能島城を見下ろせる眺めの良い山である。学校のすぐ近くを流れる川「大川」。宮窪と言えば村上海賊。「村上義弘」は、村上海賊の祖とも言われている。つまり、何が言いたいのか、そう、この宮窪小学校は、私の名前にぴったりの学校だと思った。

宮窪小学校に赴任して初めて受け持ったクラスは、四年生二十人だった。前任校で三十二人を受け持っていたため、とても少なく感じたが、実は全校で一番人数が多いクラスだった。このクラスは、男女問わずとても仲が良く、休み時間には、外で元気にドッジボールやハンドベースボールを楽しんでいた。また、授業の反応も良く、こちらが一言発すれば、「すごい！」「知らなかった！」「すごーい！」と返ってきた。社会科の授業では、玉川ダムの水を実際に汲んで見て見せたり、総合的な学習の時間の防災学習では、東日本大震災の映像や新聞記事などを提示したりした。私自身、毎回すごくワクワクしながら授業をしていた。翌年受け持ったクラスは、二年

生十三人だった。初めての低学年の担任ということもあり、とても不安だった。なぜなら、私の中の低学年の先生のイメージは、「勉強のことだけでなく、日常生活のことも何でも手厚く指導しなければならぬ」というものだったからである。私自身が、そこまでのいろいろなことに手厚く指導できるのかという心配があった。しかし、「私にしかできないこともあるはずだ。」と思い、子どもたちができるだけいろいろな経験をさせようと思った。

一つ目は栽培体験である。二年生の生活科の学習に野菜の世話を学ぶ單元がある。そこで私は、子どもたちに畑に植えた作物を尋ねた。そこで出た意見がスイカだった。失敗も学習だと思い、一人一人、ポットに種を植えてみることにした。市販の種を植えたが、奇跡的に全員の種が発芽した。全員のスイカの苗を畑に植え替え、収穫を楽しみに世話を続けた。そして夏休み。ゲンゲンとツルが伸び、「こんなはずじゃなかった。」とさえ思うくらい、たくさんスイカの実がなった。当初は一人一個スイカの実を持って帰れるくらいでしかたが、夏の気温は味方してくれなかった。熟した実が破裂したり、腐ったりして、結局、全校登校日の日に、一人半分のスイカの実しか持つて帰ること



がでなかった。そこで思い付いたのが、食べることはできないが、食ふことはできる。スイカを割り、その汁を飲むことにした。全校登校日に学校でスイカ割りをする先生など、私の浅い教員生活の中で一度も聞いたことがない。十三人で交代しながら一回スイカを叩いた。子どもたちの中には、「コロナでどこも行けなかったから、夏休みの一番の思い出になりました。」と話してくれる子までいて、私もとてもうれしい気持ちになった。

二つ目は、掛け算の九九の学習である。昨年度始まって以降、子どもたちが大流行の『鬼滅の刃』を、授業に何かの形で活かすはしないかと、日頃から考えていた。ある日の夜に、算数の掛け算の九九の学習に取り入れられそうだと、ふと思いついたのである。名付けて『計算の刃』である。掛け算の九九は、これからの算数の学習のために、二年生のうちにマスターしておかなければならないものである。ここでつまづいてしまえば、これから学習する「割り算」や「分数」などが解けなくなってしまう、とたんに算数嫌いになるだろう。なんとかこの子たちにマスターさせたいと強く思い、その思いをカードのあらゆるところに散りばめた。ひたすら暗記するよりも、せつなくなら楽しんで覚えるようにしたいと思い、『鬼滅の刃』の物語に関連させたカードを作成した。子どもたちを物語の「鬼殺隊」になぞらえて、「おぼえ隊」とした。二年生が終わるまでに全員が「九九柱」(九九を全部覚えると獲得できる称号)になればよいと思っていた期待は、良い意味で裏切られた。なん

と、二学期を終わるまでにほとんどの子が「九九柱」になっていたのだ。まだなっていない子でも、九九カードを見ればスラスラ言うことができるまでになっていた。そこで三学期には、劇場版鬼滅の刃に便乗して、『計算の刃特別編』を作ったり、大人気のゲーム「あつまれどうぶつ森」にあやかって『がんばれ計算の森』を新しく作ったりした。その結果、二年生が終わるまでに全員が掛け算の九九をマスターできた。そしてその子たちは今、隣の教室で「割り算」の勉強をとても楽しそうにしている。



私の思いが子どもたちにいつばい伝わり、当初の私の心配が嘘のような、充実した一年になった。そして今年度、本校三年目にして、初めての最高学年を受け持つことになった。ここまで読んでくださった方の中には、二年生の話に比べて、四年生の話が少ないなと感じた方もおられるだろう。なぜ少なかったか。そう、今年度、二年前に受け持っていたクラスを再び受け持つことになったからである。令和元年度三月に、突然臨時休業になり、四年生の学級じまいができぬまま終わってしまった。そのため、私の中で、「やり

切ったぞ！」という気持ちがある。分かった。心のどこかで、「もう一度あのクラスを担任したいな。」という気持ちがあった。その願いが叶ったのだ。始業式の担任発表の後、学級開きでの私の一言目は「ただいま。そしておかえり。」だった。子どもたちも「先生おかえり！」「ただいま！」と返してくれた。このときの言葉を聞いて、すごくうれしくなったと同時に、「さあ、頑張るぞ」という気持ちになった。六年生は学校行事などに大きく関わることになる。初めての六年生の担任で、不安がいっぱいである。しかしそれ以上に、この二十人は私の使命感とやる気をかき立てられる。六年生になっても、相変わらず昼休みには、全員が中庭の芝生のところでボール遊びを楽しんでいる。また、勉強で困っている友達がいれば、スツとそばに行き行って考え方のヒントを伝えたり、何か作業をしている先生方を見掛ければ、自分から進んで「先生、やりましようか。」と声を掛けたりしている。あまり言うとうそ話みたいになつてしまいが、それくらい本当にすてきな六年生だと思う。この二十人の良さを生かし、伸ばして、この一年を終えたとき、私を含めた二十一人が「やり切ったぞ！」と思えるようにしたい。

教師生活四年目がスタートした今、忘れてはならないのが、支えてくださっている周りの方々への感謝の気持ちと謙虚な姿勢である。右往左往する私に優しく助言をくださった先生方がいたからこそ、今の自分がある。これからも同僚の先生方と力を合わせて支え合い、努力を続けて、教師生活を思い切り楽しみたい。

どうして教員になりたいのか



松山市
北条南中教諭
杉野 正典
(平三二卒)



私は中学三年生の時の担任の先生に、あこがれを抱いていた。今まで出会った先生の中で最も印象に残っている。何事にも全力で、情熱的で、先生というよりは家族のように生徒に接する先生であった。そんな先生のようになりたいと思ったことが、私が教師を目指すきっかけであった。しかし、その考えは漠然としており、明確な目標が見えないまま私は高校に進学し、愛媛大学教育学部に入學した。

教育学部では、前期の内に自身の専修科目を決めなければならなかった。自分が何の教師になりたいのかも全く目処の立っていないから、私は、とりあえず私のあこがれた先生が教えてくれた英語科を専修することに決めた。そうして英語科教員を目指す日々が始まり、気付けば三回生となっていた。なんとなく教員になるために学ぶ自分を、周りの仲間と比べ、授業力も英語力も身に付いていないことに焦りを感じた。何より外の世界を知らずして子どもたちに英語を教えられるか不安になった。そして、私は海外留学を決意した。

三回生の終わりから十か月間カナダのトロントに留学をし、語学学校に入學をした。そこでたくさんの人と出会い、共に学んだ。留学は自分にとってすべてが新しくなった。カナダには、様々な国から人が集まっている。通りを歩くだけで、英語だけでなく様々な国の言語が耳に入ってきた。PrideParadeと呼ばれるイベントで、トロントの中心街を市民が練り歩くパレードが特に印象に残っている。パレードには老若男女問わず、中には性的マイノリティの人々や裸族の人まで含まれていた。誰もが差別を受けず、堂々と胸を張り、笑顔で街を歩く姿にとても感動した。日本では今はまだ見られない世界がそこに広がっていた。

留学を終えて教員採用試験の準備を始めた。面接や小論文の練習を通して「どうして教員になりたいのか」という質問に改めて向き合うようになった。しかし、「英語科教員として、留学での経験を伝えたいから」「子供と関わる仕事に就きたいから」「教えることが楽しいから」「中学校時代の先生にあこがれたから」といったありきたりの答えが、すぐ頭に浮かんだ。自分の薄っぺらさに嫌気がさした。そのまま教員採用試験に臨み、運よく採用されることになったが、教員として働いていくことができるのか不安になった。

令和元年度に、私は北条南中学校に赴任することになった。そこで二年生の学級担任と卓球部の顧問をさせて頂いた。初めての出来

事だらけで、他の先生方、特に同じ学年部の先生方や管理職の先生方にたくさん御心配をお掛けした。学級でトラブルが起った際には、学年部総出で助けて頂いた。慣れない仕事に対して悩むことが多くあったが、先生方は優しく、時に厳しくアドバイスをしてくださった。今思い返しても、私が折れないようにたくさんの方々が大事に支えてくれた一年間であったと思う。心残りがあると言えば、臨時休校により、学級最後の時間が十分設けられなかったことだ。自分でも頼りないと思うところがたくさんあったが、それでも初めて自分のことを先生として迎えてくれた生徒達と最後の一月を大切に過ごしたかったと改めて思う。

教員生活二年目には、一年生の学級担任と引き続き卓球部顧問をさせて頂いた。コロナによる臨時休校のため例年通りのスタートは切れなかったが、一年目の経験を生かし、イレギュラーな事にも対応しながら教員生活を送った。一年目は忙しいと思う間もないほどあつという間に時間が過ぎていたが、二年目になると少しゆとりを持つことができた。二年目は自分の中で「褒めて伸ばす」ことを大切に、学級経営を行った。一年生ということで、先輩の先生方からは、一から百まで教えてあげないと伝わらないと聞いていた。中学生活のスタートということもあり、校則、給食・清掃指導、委員・係の仕事等、さまざまな指導をしなければならぬが、正しくでき

ていれば、些細な事でも褒めるようにした。一度説明したからと言って全員ができるわけもなく、何度も同じ指導を繰り返すこともあった。少しでもできることが増えたならば、そこを見逃さないようにした。「褒める」という小さな心掛けではあったが、その中で生徒が少しずつ成長していく様子を感じられた。

二年目の一年間は無事に三月まで終えることができたことを、とても嬉しく思った。一年目に臨時休校でできなかったお別れを、この学級の生徒たちにしたという思いで、生徒一人ひとりにメッセージを書いた。修業式の日にもそれを手渡し、中には涙を流す生徒も見られた。手紙を書いてきてくれた生徒もいた。後日、生徒からクラス全員のメッセージカードを手渡された時には驚いた。この生徒たちの人生に関わることができたことを幸せに感じた。

「どうして教師になりたいのか」という問いに対して、採用される前は納得する答えが浮かばなかった。しかし、二年と数か月の教員生活を過ごした今、以前の私が思い浮かべていた「英語科教員として、留学での経験を伝えたいから」「子供と関わる仕事に就きたいから」「教えることが楽しいから」「中学校時代の先生にあこがれたから」という、これらのありきたりな理由に納得ができた。

授業をしている時、生徒が退屈そうにする時がある。その日は授業構成がまずかったと反省し、それを踏まえた授業づくりを行う。

その繰り返を通して、生徒が興味を持って授業に耳を傾ける場面が増えてきた。生徒が「分かった!」という瞬間に立ち会うことが、これほど嬉しいものなのかと実感できた。授業の中で留学について話した。外国には、生まれ十数年の生徒達には知れない世界があることを伝えた。目を光らせて話を聞く姿を見て、英語の授業が子どもたちの世界を広げるための足掛かりになればと考えるようになった。教員生活の中で教員とは、生徒たちの人生に多かれ少なかれ影響を与える存在であることも実感できた。また生徒と関わるだけが教員の仕事ではなく、生徒の見えないところでも、直接的に関わりのないことでもしなければならぬと身を持って理解できた。そのため、時に生徒の元気に追いつけなくなりそうになる。それでも私たちに全力を注いでくれていた中学三年生の時の担任の先生はとても愛にあふれていたのだと改めて思った。

採用が決まった時、正直自分が本当に教員になって良いのかと、不安に思うこともあった。「このご時世、教員になるなんて大変だね。」と言われたこともあった。それでも今は教員という職業を選んで良かったと思う。頭では「どうして教員になりたいのか」という理由が浮かんでいても、実際に体験しない限り分からなかった。それは何事にも当てはまる。今後様々ことに挑戦し、考えて不安に思うよりもまずは、行動に移すように心掛けていきたい。

教師の『本気』が 生徒の『やる気』を生む



東温市

川内中教諭

片山 祐貴
(平三三卒)

「片山先生が一番僕のことを心配してくれた先生でした。」三月に高校を離任する際に、生徒から送られた手紙の一文です。高校の講師経験での挫折と、たくさん生徒との出会いが私の教師としての原点です。この一文を読み返すたび、身の引き締まる思いがします。

私は二年間の私立高校での講師経験を経て、中学校教員になりました。前例のあまりない貴重な経験ができたと思います。まだまだ始まったばかりの教員生活ですが、これまでを振り返ってみたいと思います。

私が教員を目指したきっかけは、高校の恩師との出会いがきっかけです。いつも夜遅くまで学校に残り、補充学習に協力してもらったり、将来への不安を聞いてもらったりしていました。そのような熱心で親身になってくださる指導に憧れ「いつか自分も先生になって、生徒のために尽くしたい」という思いが強くなり、教師を志しました。

大学卒業後、縁があって、私立高校の講師として教壇に立つことができました。「毎朝誰よりも早く学校へ行き、教材研究に励み、夜は遅くまで生徒に勉強を教えた、将来を語り合ったりする！」

このような理想を描き、毎日期待に胸を膨らませていました。しかし、そのような日々は長くは続きませんでした。思うように生徒が反応しない一人よがりな授業。私の考える「当たり前」と生徒の実態との大きな隔たり。これまで深く考えてこなかった配慮の必要な生徒への対応。理想と現実の大きな差に押し潰されました。教員としての自分に限界を感じ、もう教壇に立たないほうが良いのではないかとも思っていました。転職を本気で考え、転職サイトに登録したり、企業の応募書類を取り寄せたりしたことさえありました。私の心はどん底まで沈み切り、毎日生徒に会うのが辛かったです。そのような中で、ある生徒が「片山先生のおかげで英語が好きになった。」と話していたことを先輩教員から聞きました。私が期待で胸を膨らませていた頃、毎日本気で向き合い、勉強を教えたり、生活の相談に乗ったりしていた生徒です。心が疲れ切っていた私に一筋の光が差し込んだ瞬間でした。その生徒のことを思うと、本気で生徒に向き合えず、教師を辞めようとしていた頃の自分が情けなくなりました。生徒の一生に影響を与える一人の人間として、「中途半端な気持ちではいけない。まずは一所懸命に目の前にいる生徒一人ひとりに関心を持ち、会話し、尊敬し、理解していこう」と強く感じました。「職業」として教師を選択するのではなく、教師という「人生」を歩んでいこうと固く心に誓いました。それ以来、しんどく、辛く、苦しい時期も多くありましたが、教師を辞めたいとは思わなくなりました。あの苦い経験があったからこそ、今もこうして生徒と真正面から向き合えるのだ

と思います。

当時、生徒が一日の学習や生活を振り返り、オンライン上に記入をするという取り組みがありました。学級の多くの生徒は面倒くさがり、その記入をなおざりにしてしまう状況でした。そのとき、「教師の『本気』が生徒の『やる気』を生む」という言葉を思い出しました。教材研究に没頭し、本を読みあさっていた四月、私の心に響いた言葉です。まずは私が本気になり、行動で示そうと決めました。教師はオンライン上にいつでもコメントを生徒に返すことができます。「君たちが朝起きる前には必ずコメントをするから、夜寝る前に一日の振り返りをしてほしい」と生徒に語りました。初めは朝の五時からコメントをしていた。生徒への思いが募り、コメントが日を重ねるにつれて長くなり、全員分記入をする頃には六時過ぎていました。六時にはすでに起きていた生徒もいます。生徒に私の「本気度」を示すため、今度は四時からコメントを返すことにしました。初めは「そこまでしなくても……」と声を掛けてくれた生徒もいました。正直、私のこの行動を冷やかな目で見ていた生徒もいます。しかし、まだまだ未熟で経験の乏しい、駆け出し者にできることは、「本気」になり、それを生徒に「行動」で示すことしかないと思っていました。少しずつ生徒は私の本気さに理解を示し、取り組みの様子が変わっていききました。教師は非常に大きな影響力を持っています。家庭以外で最も関わることの多い大人です。感性の鋭い生徒たちは、我々が本気であるかどうかすぐに見抜きます。生徒たちをあなどらず、誠実に向き合い、本気で接していくこ

とが重要なのだと私は身を持って体験することができました。

講師時代には心に傷を負った多くの生徒がいました。彼らに話を聞くと、その原因は中学校時代の教師の指導や人間関係のトラブル、学習面での不安や家庭での不仲など非常に多様でした。毎日登校できるのが当たり前だと思っていた私にとって、それは大きな衝撃でした。私は何度も生徒の言葉や笑顔に助けられ、元気をもらっています。今度は私が生徒を励まし、笑顔と元気を与える番だと思いました。高校より早い段階で彼らに手を差し伸べたい、変化の激しい思春期の心の支えになりたいと思います。私は中学校教員を志しました。

教員採用試験に合格することができ、初めての中学校での教員生活が始まりました。今は中学一年生の学級担任を務めています。中学校と高校で大きな違いを感じたことが二点あります。

一点目が授業展開の速さです。高校では分かっていることが前提でどんどん先へ進めていたことも、中学校で習った「基礎」があつてのことです。これまでと同じ感覚で授業を進めていては、ついて来られるのは、ほんの一部の生徒だけです。一つ一つ、丁寧に指示を出しながら、何度も全体で確認をし、授業を進めるようにしています。また、英語は小学校とのギャップで苦手意識を持つ生徒が多くいます。授業の最初に「カルタ」に取り組ませ、ゲーム感覚で英語を学ぶ雰囲気を作れるように工夫をしています。

二点目が個別の支援の重要性です。高校では、ある程度学力で生徒が選ばれます。しかし、中学校は違います。地域で生徒が決まり

ます。教師は、その学力の多様性に対応する必要があります。中にはどうしても授業中に集中力が切れてしまう生徒や、文字のバランスがとりにくく、アルファベットを正確に書けない生徒もいます。私は誰一人決して取り残さないという心を決め、休み時間などを利用して、彼らに向き合っています。勉強の得意な生徒と比べると、学習の定着度や応用力はまだまだかも知れません。しかし、最も重要なことは、人と比べたときの成長ではなく、個人内での成長だと思っています。昨日より伸びたこと、できるようになったことを褒め、励まし、自信をつけさせるように意識しています。ついできていないことに目が向いてしまいがちですが、生徒は自分なりに努力をし、少しずつできることが増えていたり、昨日より成長したりしています。教師の役目は生徒のあら探しではなく、宝探しです。生徒の変化を見取り、誰よりもその成長を喜べる存在でありたいです。「教師の『本気』が生徒の『やる気』を生む」この私の実体験をもとに全力で生徒と向き合っていきます。生徒を励まし、また、私自身が励まされる毎日が宝物です！



自分らしく



内子町
五十崎中教諭
永尾 隼人
(平二三卒)

教員になり、十年が経ちました。小学校教員として採用され八幡浜の小学校で四年間勤め、内子町に中学校教員として異動となり今年で七年目になりました。

この十年を振り返ると、たくさんのお会いがありました。赴任先で出会った子ども達、保護者の方々、職場で支えてくださった先生方、多くの出会いが今の自分をつくってくれているのだと思っています。そんな中でも、今でも初任校として勤めた、小学校での三年間が私にとっての教員の原点です。大学卒業前の、三月末に初任校を伝えられ、初めて学校を訪れたときは、期待よりも不安が大きかったのを今でも覚えています。着任の日、職員室で先生方に挨拶をし、先輩の先生方が、年度初めの仕事を着々とされている中、何をすればよいのか分からず、ただただ戸惑っていました。そんなときに、一人の先生が、「永尾君、暇だろう？一緒に校区内をドライブしよう。」と言ってくださいました。その先生は、私と同様に異動して来られ、学校の中心として、多くの校務を抱えられていたのにも関わらず、そのように声を掛けていただき、とてもうれしく思いました。その先生の車に乗り、校区内を走りながら、その

先生は様々な話をしてくださいました。私の学生時代の話も興味を持って聞いてくださり、ご自身の初任者時代の話もしてくださいました。不安ばかりだった気持ち、安心に変わったのを今でも覚えています。教員として、まだ何も分からず、話の聞き手、同じ目線に立って、話を聞いたり、したりしてくださったことがとてもうれしく思いました。

新学期が始まり、いよいよ子ども達との出会いのときがやってきました。最初の挨拶はどんな挨拶が良いのか、数日前から悩み、本屋に行き、自己紹介の本を読みあさりました。真っ白い用紙に、手書きで原稿を書き、気合いを入れて新任式に臨みましたが、全校生徒の顔を見ると、頭の中が真っ白になり、何を言っているのか全く分からなくなりました。そしていよいよ迎えたクラス発表の時、担任が発表され、私がクラスの子どもの達の前に立ったとき、子ども達の目はとても輝いていました。教室に行き、この日のために練習した手品を披露し、学級開きはなかなかの手応えでした。初めに担任をした二年生の子どもの達はエネルギーに溢れ、いつも賑やかな声が教室中に響いていました。授業では、教材研究をして臨むものの、自分が予想もしない反応が子ども達から返ってきて、パニックになってしまふこともありました。うまく指導することができず放課後はいつも職員室で悩んでいました。子ども達の実態を把握せず、「これくらいは分かるだろう。」と思い授業をすると、子ども達を困らせてしまうことが分かりました。二年生の子どもの達はとても素

直です。わからなかったり、つまらなかつたりすると、それを素直に言葉にします。先輩の先生方の授業を見させていただき、勉強させていだくのと同時に、自分の授業を振り返ったときに、自分は子ども達に、何を伝えられているのか、自分自身を責めることが多くなりました。そんなとき、私を励ましてくださったのは、当時の校長先生をはじめ、同僚の先生方、そして、私に最初に声を掛けてくださった先輩の先生でした。「永尾君らしくやればいい。」そう言っていたとき、自分らしさについて考えました。それから、うまくいかないことは多くありました。でも、子ども達に全力で向かっていると、失敗して落ち込んでいても、次の瞬間には子ども達が生あふね。」と言って笑顔で話しかけてくれました。子ども達の明るい笑顔を見てみると、頑張ろうという気持ちが湧いてきました。初任者の一年はあつという間に過ぎました。

その後、小学校教員として三年間勤め、突然、中学校に異動することになりました。これから、小学校教員としてやりたいことが多くあつた私は、頭の中が真っ白になり、何も手がつかなくなりました。そんな時も、私を励ましてくださったのは、初任者から憧れとする先輩でした。お酒を飲みながら、「僕は中学校の経験はない。僕ができなかった経験を、君にはしてもらいたい。きっとできる。」そう言っていたとき、落ち込んでいた気持ちが、一気に前向きになれた言葉でした。中学校に異動した最初の年は、小・中のギャップに、戸惑い

た貴重な思い出です。三年間ともに過ごした生徒との別れの卒業式は、周りのことを気にせず、大号泣をしました。自分らしく、生徒と共に全力で汗をかき、涙を流し、喜びを分かち合い、本当にたくさん思い出ができました。あのとき、自分らしさを見失ってしまっていたら、この思い出はできなかったのではないかと思います。教員として十年経った今でも、悩みはたくさんあります。周りの先生方と自分を比べ、できないことに自信をなくすこともたくさんあります。そんなときこそ、「自分らしく」とは何かを考えるようにしています。たくさんの方との出会いが私を大きく成長させてくれました。「人の嫌な所ではなく、その人の良いところを見つけなさい。」この文章の中で何度も登場した、私が最も憧れる先輩がいつも私に言ってくれた言葉です。自分らしさも大切にしつつ、自分の周りにいる全ての先生方、子ども達、保護者の方々と関わりを大切に、その人達の良い所を自分に取り入れ、これからの教員として更に成長していきたいと思ひます。



教育2号館リニューアル

教育学部2号館がリニューアルしました。以下、簡単ですが紹介します。

各階の様子と教室

外観はあまり変わりませんが、階によっては内部の教室・研究室等は大きく変わりました。

《1階玄関》

入口は全面ガラス張りで明るくなりました。また、床も張り替えられ、雨天時にも滑りにくくなりました。



教育学部玄関からの外観



2号館1階エントランスの床



2号館入口



2号館1階エントランス

2号館1階エントランスで大きく変わったのは、休憩コーナーをなくし、写真左のようにバリアフリーとなったことです。車いすでも気軽に教育支援ルーム等に行けるようになりました。

その教職支援ルームもリニューアルされました。全体的に明るくなり、学生との会話も弾みそうです。窓も大きくなったので、学生も入りやすいと思います。どんどん活用して欲しいと思います。



※ 教職支援ルームは2室設置しています。

教職支援ルーム 1

《1 階教室》

廊下は明るくなり、キャリア開発室1室・教職スキルアップルームが3室設置されました。その他教職カンファレンスルームや模擬授業教室、オープンラボ室等が設置されました。

特に、1階中央には、南北とも廊下教室の仕切りを取り払ってオープン教室的な多目的使用のスペース（名称：高度化ゾーン）が4カ所作られました。



北側高度化ゾーンの西側



北側高度化ゾーンの東側

※ 同様に通路をはさんで南側にも作られています。

《2 階》

2階は壁面が各階同様明るい色で塗り替えられ、従来通り教員研究室となっています。

《3 階》

3階には、初等教育アクティブラーニングルームが2室、自然科学系アクティブラーニングルーム等が設置されました。



明るくなった廊下とアクティブラーニングルーム



アクティブラーニングルームの表示

《4 階》

4階には、初等教育アクティブラーニングルームが2室、人文社会科学系アクティブラーニングルームが設置されました。以前403教室として授業に使っていた場所は大学院生の控え室に変わりました。

《5 階》

5階は壁面は塗り替えられ明るくなりましたが、教室及び研究室等の配置は変わっておりません。

愛媛大学教育学部で「四国 ESD フォーラム2021 日本 ESD 学会第2回四国地方研究会」を開催しました

学部トピックス

令和3年3月14日(日)、愛媛大学教育学部で「四国 ESD フォーラム2021 (日本 ESD 学会第2回四国地方研究会)」を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

本フォーラムは、四国の ESD、SDGs について互いに報告し合う場を提供し、更なる交流・発展を促進することを目的として開催しました。当日は、四国4県を中心に、全国各地から約140人が参加し、新型コロナウイルス感染拡大防止策を徹底した上で盛大に実施することができました。

はじめに、四国 ESD 活動支援センターの近森憲助センター長(高知学園大学学長)から開会挨拶があり、昨年ユネスコから出された「ESD for 2030」やSDGs 国内実施計画に触れながら、四国内のSDGs、ESD 推進拠点が連携して研究会を実施することの意義が強調されました。

続いて、日本 ESD 学会の見上一幸会長(前・宮城教育大学学長)による『学校教育における ESD & SDGs』と題した基調講演が行われました。基調講演では、日本の学校教育において ESD やSDGs が置かれている現状や課題について分かりやすく説明があり、東北地方を例にしながら、先進的な自治体や学校の取組が紹介されました。また、今後のSDGs 推進の在り方などについてもお話があり、SDGs や ESD を実践していくことの意義について改めて認識できた貴重な時間となりました。

その後、四国4県から1校ずつ選出された高等学校によるSDGs の取組が紹介され、参加者からの指摘や提案を受ける「高校生×大人 ESD トーク」が行われました。本県からは愛媛大学附属高等学校の代表生徒が、愛媛大学教育学部附属幼稚園との農業交流などを通して実施している「持続可能な農業」や愛媛大学の留学生との米作り交流から世界の食糧問題へと意識を向けた「おにぎりアクション2020」への参加など、探究的な学びを実践したことについて、発表しました。

午後からは4つの分科会に分かれ、四国内で先進的にSDGs に取り組まれている企業や自治体、NPO、学校等による発表やワークショップなどが行われました。最後に、全体で共有し、四国内の ESD、SDGs 拠点がさらに連携・推進を図っていくこと、本研究会を継続して実施することを確認して閉会となりました。

愛媛大学では、今後も積極的にSDGs、ESD の取組や研究を行い、持続可能な社会、地域、世界の実現に貢献してまいります。今後の動きにもぜひご注目ください。



基調講演の様子



附属高校生の発表の様子



分科会も対面と ZOOM のハイブリッド

今治市教育委員会及び上島町教育委員会と連携協力事業の調印を行いました

令和3年4月26日(月)、教育学部が今治市教育委員会と上島町教育委員会と令和3年度連携協力事業の調印を行いました。

これらは、「教育現場の諸問題のために、理論と実践の一体化による研究を推進するとともに、教師の創意工夫を生かした授業を創造し、児童生徒に多様で確かな学力を身に付けさせる」ことを目的に連携するものです。今治市教育委員会とは平成15年度から、上島町教育委員会とは平成30年度から毎年覚書を交わし、教育現場の具体に即した共同研究を継続的に行っており、これらの成果は、『研究報告書』の形でまとめています。

なお、教育学部はこれまで、愛媛県を始め、松山市、今治市、伊予市、松前町、東温市、愛南町、内子町、西条市の教育委員会、さらには教育研究団体である愛媛県教育研究協議会とそれぞれ連携協力の覚書を交わし、その活動を通して、教育研究、教員研修、教員養成について多くの成果を挙げています。



今治市教育委員会
田坂敏教育長



小助川元太教育学部長
(今治市教育委員会との協定書)



上島町教育委員会
高橋典子教育長



小助川元太教育学部長
(上島町教育委員会との協定書)

部活動紹介

愛媛大学書道部

私たち、愛媛大学書道部は四回

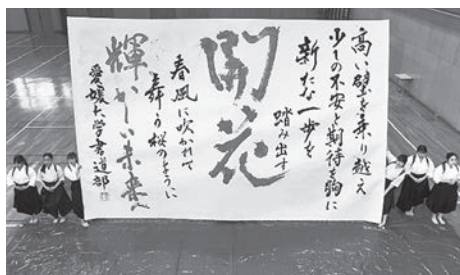
生七名、三回生六名、二回生三名の計十六名で活動しています。(五月現在、感染症予防のため対面での活動が全団体一律停止のため、新一年生には対面での活動の見学待ちという対応をとっています。)

愛媛大学書道部の主な活動は、各書の展覧会への出品と学内での展覧会に向けた書作品の制作と、昨年度から新しく取り入れた書道パフォーマンスです。部員のほとんどが書道経験者ですが、もちろん大学から筆を執った部員もいます。また、書道パフォーマンスを経験したことがなかった部員もいます。「書道の創造的な諸活動を通して、書道の伝統と文化を尊重する態度を養う。また、書の技術を磨く中で感性を磨き、人間性の涵養につなげる。」という目的をもとに、四年間をかけて臨書(お手本を見ながら字を書くこと)を行うことで古典から技術を習得

し、さらには感性を磨きながら人間性を涵養することができるよう活動しています。

〈活動成績〉

例年は、全日本高校・大学生書道展や全国学生書写書道展、全国学生書き初め展覧会などに出品しているのですが、昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響によってほとんどの展覧会が中止となっていました。しかし、唯一出



作品1 新入生に向けた書道パフォーマンス
動画撮影の様子(2021.3月)

立徳踐行當四科之
首飾文碩學爲

佐藤 明

作品2 全書会会長賞
4回生 幸山 晴輝

品することができた第三十六回全国学生書き初め展覧会において、優秀な成績を収めることができました。上位成績である全書会会長賞を受賞いたしました。第三十六回全国学生書き初め展覧会ネット展より閲覧できますので、是非ご覧ください。

また、本年度は新入生に向けた書道パフォーマンスを撮影し、YouTubeに公開いたしました。本来であれば、新入生にかかわらずたくさんの方に見ていただけるよう、学内で披露する計画をしていたのですが第四波のために中止ということになってしまいました。本年度は学生祭や他の企画の中で、実際に観客の方に披露できるように、頑張っていきたいと思っています。

〈中・四国国立大学連合美術展覧会〉
中・四国国立大学連合美術展覧会とは、年に一度、中・四国の旧



作品3 春季展覧会の様子
(於：愛媛大学学生会館)

国立大学(現国立大学法人)が一同に会して、演奏会及び展覧会(中・四国国立大学連合演奏会・美術展覧会)を行うものです。本年度は愛媛県が主催で行われることとなり、企画・運営のために担当部員は尽力しています。新型コロナウイルス感染症の影響により例年通りの開催をするのは難しいのですが、新たな展示方法を考える皆さんの方にご覧いただけるよう企画しておりますので、是非お

楽しみにしていただけると幸いです。

〈愛媛大学書道部展〉

私たち書道部は、本年度の二月に愛媛県美術館にて「愛媛大学書道部展」を開催することを予定しております。これまで私たち書道部が作成した臨書作品や創作作品に加え、卒業された先輩方の作品、そして愛媛大学書道部展のために新たに作成した臨書・創作作品についても展示できるよう準備しています。書道部展においてたくさんの方に私たちの活動を知っていただくよう、また書道部のさらなる発展に向けて活動しておりますので、応援のほどよろしくお願いたします。また機会があれば、愛媛大学書道部展に足を運んでいただけると幸いです。

愛媛大学書道部
代表 河野 亜美
・メールアドレス

ehimeunv.shodoubu@gmail.com

先輩を偲ぶ



あしあと(5)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より抜粋)



昔々の思い出

愛媛県師範学校

兵頭(旧布川)フチエ氏寄稿

(明治四二年卒)

私が入学したのは、松山へ来ていた露国の捕虜も帰国し、本校学生のスツ騒ぎも治まり、有名な大石和太郎校長の金縁眼鏡がこわいときでした。



前列中央が筆者

従来郡別に割当てにより合格させていたのを、私等の時から県下で成績順によって合格と言うことになり、北宇和で二人、西宇和一人、喜多郡七人、東南両郡なしと言う南予でした。服装は和服木綿直縞の長袖に、エビ茶の袴、髪は日本髪の手ヨウ返しを、しかも自分で結わねばならなかったのを、前年のスツのおかげで、髪はソクハツ、長袖が筒袖になり、たいへん助かりました。

上松は海路で宇和島丸、大分や別府へつけましたから船で一夜明けけるわけです。別府は碇泊が長かったから、乗客は船で入湯に行き、出港までに帰るのでもことに悠長なものです。翌朝九時ごろ三津へ着きましたらどうか。三津からは坊ちゃん列車がありました。

寄宿舎は校門の東側西側にテニスコートがあり、校門には門衛さんが居ていつも出入を見守っていました。夕方は相川先生・岸高先

生も来られ、いっしょにテニスをしたものです。寄宿舎の地は旧武家屋敷跡とかで、お手打ちになった女中の濡れ髪の幽霊が出るとかで、夜は一人でトイレへ行くのが恐かった。教室は学科別で男女共同で毎時間交代しました。男生の居た後へ入ると男臭いので窓をバタバタ開けました、男生も女臭いとてやはりバタバタ開けました。

教室の交代の時、廊下の西側に男生がズラリと並んだ中を、何かのつごうで一人を通る時は、恥かしいことでした。とくに私は校歌ができてからは「我吐くいきに浮華は飛び(布川)」と大勢で一声にはやされるので、なおさらでした。はやした人も大分極楽へ行かれたことです。次の新入生は四〇人になり、舍もせまくなるので、三年生が魚町の民家を借りた校外の方へ出るようになりました。

炊事の方は炊婦が三人居まして、生徒の方は室ごとに週番が献立を作り、生徒中から炊事係長一名任命で舎監との連絡をとり運営しました。係長に私が任命せられました。係長に知らないで炊婦さんに大分いろいろ教えてもらいました。食費は一日一人十三銭五厘、男子は兵隊さん並みで十六銭と聞きました。米が一升(一kg三〇)十五銭、コンニャクが一銭五厘か二銭のようでした、当時宇和島では中学生の下宿代が一日米一升とのことでした。外泊者のない時はやりよいのですが病気とか何とかで外泊者が出るとたいへんです。二三人へった所で分量はあまり

変わりませんが、収入の方がへるので会計の方はやりにくくなります。

私どももある時期、校外へ出ました。魚町の時も楽しかったです。その時は炊事係長は吉田勝子さんで熱心に炊婦の指導をなさいました。何年生の時か大林寺にも居た事がありました。寺に年老いた納所さんが居られて、だれが言い始めたか、味噌すりさんと呼びました。納所さんはいつも笑顔で私に接して下さって、寺を出た後に味噌すり坊主の意味を知り赤面を感じました。三年生の時再び私が炊事係になり、道後の土手へ蜚狩りに行った時は、一人五銭の菓子袋の配給ができました。食費の残金で全員におみやげをと思いましたが、遠山金監から「布川、お金を残して置いておくれや」と言われ、みやげは止めました。

三年生の時ピアノが初めて入りました。また県高女と唱歌のコンクールがありました。私の方々が少しおくれ居るように思いました。男女関係はきびしく、桃色遊戯でも知れたら退学です。しかし教室の机の中にラブレターがあった話もありました。いま一つ面白かったのは、国語教室と中庭をはさんで男子寄宿舎があつて、卒業近い男生がセビロや中折帽を私らに見せびらかしたり、靴をひもで結んで二階から下へ下ろしたりして、私らに見せることです。むろん先生のいらつしやらない間のことです。

青春の思ひ出に米寿の嫗若返り

追想

愛媛青年師範学校

稻荷 清市氏寄稿

(昭和八年卒)

昭和六年四月入学、昭和八年三月卒業。当時は二年ごとに入学、生徒数も二〇名程度(同期十九名)、年令も経験もまちまち、同級であった谷口治作氏はもう故人になったが、小学校長の職を辞して入学された。私たちは氏を級長に選任、あれこれ細かい点の指導を仰いだものであった。奥田卯十郎氏(故人)は陸軍上等兵で、軍事教練の時間には小隊長としてよく部下のめんどうを見てくれた。

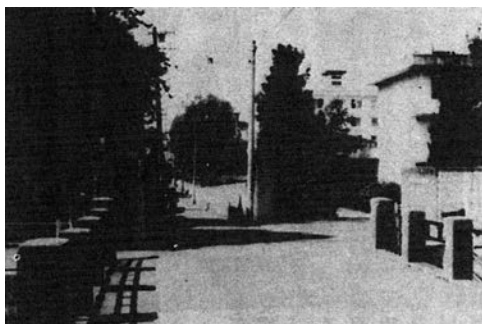
松山農業学校が六角堂から桑原へ(現在の愛大農学部)移転間もなくで、私たちの教員養成所もここに併設されており、学校の周囲はほとんど人家はなく、実習地が普通農場と桑園で全く田園の中の学校であった。専任の先生は二人で、校長は松農校長が兼任、他の先生は師範・松高・高商・県庁農林水産課・松農等からの兼任であった。卒業時に小学校本科正教員の検定試験もあるため缺を持つ手に図画・音楽等むつかしい指導を受けた。教職以外の専門教科では普通作物・作物病理・昆虫・林業・養蚕等すべて実習が必要であるため、日が暮れるまで、また養蚕実習は夜を徹して学習、瀬戸内海の島をまわりながら水産講習や海洋訓練を受けたこと等思い出はつきない。卒業を前に桑原小学校を付

属校として、青年教育（夜学）の授業や、小学生の授業を三か月にわたって行った。今その当時の児童の中で、教育界に進んだ諸君は現職校長となって活躍している。自転車道県内の小学校や補習学校を何日も宿泊しながら視察したし、遠く宮崎・熊本等の学校や教員養成所を訪ね、交歓会をもったことも思い出である。満州事変・支那事変等戦争への進展をはらみながら青年教育の重要性が痛感される中で、われこそ青年教育の第一線で骨を埋めるのだとの信念と決意をもって卒業した。当時は教員養成の必要度高く、師範学校・青年師範も含め給費制度で、われわれは月額二五円の支給を受けたので、下宿代や本代を支払ってまだ残金があった。もちろん授業料等は不要であり、優遇されていたもの、それだけに卒業後は教育のために心身を捧げたつもりである。

戦争はいよいよはげしくなり、同級の諸君から応召者相次ぎ、戦場の露と消えた者（高市充君・杉葉勝君）もあった。いずれにせよ戦前戦後にわたる長い年月、追想は切れない。

このたび愛大一〇〇周年記念事業の一つとして同窓生による青師記念碑の建立が計画されていることはまことに意義深く、時移ろい世の盛衰はあったにせよ勤労青年教育指導者の殿堂としての母校は忘れ得ぬものがあり、その建立の一日も早からんことを願っている。

卒業以来四十有余年、母校愛大農学部周辺は新しい住宅に埋もれ、往年の広い実習地や桑園はもうなくなっている。稿を置くに当たり、故人になった同級諸兄の冥福を祈ると共に、幸いに健康に恵まれ、第二の人生を歩みつゝある同期各位の、いよゝの健闘と愛大の発展を心から祈るしだいである。



今は昔、山越、青師跡かいわい

教育学部発足のころ

愛媛大学教育学部

河 瀨 計明氏寄稿

(昭和二十八年卒)

愛媛師範学校創立百周年という記念すべき年を迎えましたが、学部在職しているということに記念誌への執筆を指名され、勇を鼓して拙文を記すことにいたしました。

我々、昭和十一年生まれが卒業してから、はや二十余年、百周年

の四半分に相当するわけですが歳月の過ぎるのは、まことに早いものです。

「春が来たかよ愛大のお庭さ、草が生えた、生えた……」

とコンパで歌った城北キャンパスも、今では教育学部・教養部・中央図書館・法学部・工学部などの建物が所せましと建ち並び、往年のような、授業中の教室への野犬の侵入、校庭のクローバー上のソフトボール、格納庫跡での素人連の軟式テニス等々、もはや昔日をしのぶ語り草です。ところどころに植えられていた楠の若木も、今では十メートル以上に成長して大学の歩みと共にその年輪を加えています。

学制改革に伴い教育学部が発足してすでに四半世紀に及びますが、新制高校三年生・青年師範・師範・旧制高校・高等工業等々、当時の諸学校の二年生が発足直後の愛媛大学を受験したのが昭和二十四年の六月中旬。持田の文理学部（旧松山高등학교、現教育学部各附属校）の章光堂（現存）で藤本満治初代学長を迎えての七月下旬の入学式。単位とか、ガイダンスとか聞き慣れぬ言葉に戸惑ったことを思い出します。

当時の教育学部は、旧制師範学校・新制大学教育学部二年課程初等科・中等科・四年課程の初等科・中等科と多彩な編成であり、しばらくは一年課程も併設されていたと記憶しています。当初の校舎は、二三年に開催された松山復興大博覧会場跡の建物を利用した



理科専攻生たち（昭36. 3. 自然科学館の前で）

のでしたが、今も最北にあった平屋の一棟だけが補修を重ねて学生のサークル室や売店、理容室などに活用されております。

大学になってからはクラス編成がなかったことから、皆さんの学生生活の思い出も研究室やサークル活動を中心にしたものが多いことと思います。共通して思い出せることといえば、四年次の秋の教育実習、それに続いた参観旅行（南予の石城中学校・喜佐方中学校）、秋の開学記念日（十一月十一日）を中心催された学生祭などでしょう。徹夜をしての展示の準備、先生方も交えた研究室対抗の



クローバーの上で
(昭27. 美術室前庭)

リレー、後夜祭のファイヤー・ストーム等々思い出はつきません。思えば、当時は生活単元問題解決学習の花やかなりしころで、大学で使用した教科書も一部は生活単元的でありましたが、ほとんどの講義は第一章、第一節とはじまる系統的なものでした。専門課程では、理系の場合かなりの時間を実践に当て、設備は不十分だったものの、夜おそくまで裸電球の下で実験をしたこともありました。実験を終え、空腹にしてみた、当時一ぱい三十円の鍋焼うどんの味は今も語り草です。原稿を記すうちに、往時のことがあれこれと彷彿いたしますが、それらをしたための紙面もすでにありません。皆さんもきつとご自身の回りに多くの思い出をおもちのことと思います。

ふり返って見ますと、我々教育学部第一回卒の大部分の者は、師範学校最後の先輩との学生時代の接触はほとんどありません。かつて、同窓会誌で教育学部創設のための資金集めに先輩諸兄が先生方と東奔西走、果ては演劇までも催したという苦勞話を読んだことがあります。思えば、兄らの苦勞も知らないで勉強した弟妹たちだったということになります。今春はもう第二四回の卒業生が学窓を離れました。おたがいに、老眼鏡の購入を本気で考えることもやむをえないかも知れません。斯界にあって、ご健勝にますますご活躍下さいますことを祈つてやみません。

会員の声

春や昔

井手窪 理
(昭和三十七年卒)

春や昔十五万石の城下哉

正岡子規明治二八（一八九五）年の句です。

私は昭和三〇（一九五五）年春からこの城下で高校生活を始めた。十五歳、親元を離れての下宿生活です。（写真）

なお、二十八歳の青年教師夏目金之助（漱石）が、愛媛県尋常中学校（のち松山中学、現松山東高等学校）の英語教師として松山の地を踏んだのは明治二八年四月九



日。三番町にあった城戸屋旅館で旅装を解きました。数日後、城山の麓にあった骨董商・津田保吉方の愛松亭に下宿を決めます。六月下旬には、二番町の上野義方夫妻宅に下宿を移ります。この離れが愚陀仏庵です。一年間の松山滞在中、道後温泉しか気に入らなかった漱石ですが、松山との縁は深いものとなりました。大きな転機となったのが、子規との五十二日間の同居です。

話は前後しますが、子規が漱石と同居するようになった概略を書きます。子規は慶応三（一八六七）年温泉郡藤原、今の市内花園町に生まれました。明治一六（一八八三）年十七歳で上京、同三五（一九〇二）年九月一九日、上根岸の家で没するまでに九回松山に帰っています。その最後の帰省が明治二八（一八九五）年でし

た。同年四月、新聞日本の記者として日清戦役に従軍、五月、帰国の途船中で発病して重体に陥り、神戸須磨で療養の後八月二五日松山に帰り、松山中学英語教師であった親友漱石の寓居に同居することになったのです。漱石は、子規に愚陀仏庵の一階を明け渡して、自分は二階に移りましたが、子規のもとには毎日のように松山の俳人が集まり、騒がしく、本を読むこともできないので、やむを得ず俳句仲間に加わった、と後に語っています。子規の上京で同居は幕を閉じますが、こうした生活は文学者漱石の萌芽となりました。松山滞在から十年後明治三八（一九〇五）年、漱石は松山出身の高浜虚子の勧めで、俳誌「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を連載。翌年には松山での生活をもとにした「坊っちゃん」を書き、作家としての地盤を築きました。

さて、私が入学した愛媛県立松山南高等学校（前県立松山高等女学校）は子規の生まれた花園町の近くにありました。私の下宿先は学校近くの泉町に決めました。

昭和三一（一九五七）年、三年生の時の私の日記を読み返してみると、「高校生になってからいったいどういうことをしてきたかと振り返り、もっと時間を有効に使い、学生の身分である勉強をし、有益な社会人になるために、精神

と身体をつくるためあらゆる手段をつくすことが大事だ」（四月二三日）と書いています。そういう決意から、四月一八日（木）「今日は、学校のクラブ結成会があった。僕は色々考えた末山岳部へ入った。僕の新しい世界が一つふえたわけだ。」そして、四月二八日（日）皿ヶ嶺に一泊二日の登山を行っています。松山の南にそびえる標高一、二八メートルの山です。

昭和二三（一九五八）年、私は愛媛大学教育学部に入學しました。この大学は国立の総合大学で、昭和二四年に旧制松山高等学校、愛媛師範学校、愛媛青年師範学校及び新居浜工業専門学校を母体とする新制大学として発足。同二九年在愛媛県立農科大学が国立に移管され、私が入学した時は、文理学部、教育学部、工学部、農学部がありました。その頃は、松山市持田町の旧制松山高等学校の跡地（現教育学部附属幼・小・中学校）に大学本部があり、そこで全学部の学生が一年半にわたり一般教養を受け、その後、それぞれの学部のある地（文理学部はそのまま持田、教育学部は同市文京町、工学部は新居浜市、農学部は同市樽味）へ移動するのです。

私は、山岳部に入部しました。さっそく四月二九日から一週間にわたる新人学習でした。また、私

は山口県から来ていた同じ部の繁永君の勧めで彼と同じ道後北代の下宿へ引越しました。

あなたは、岡山県から徳島大学に進学したとか。徳島の城下はどうでしたか。私は大学生時代も下宿を何箇所か変わりました。当時は、木造の二階建住宅の一階に大家さんが住み、二階の数部屋を学生などに貸す家が多くありました。そこには愛媛県下各地からだけでなく、県外山口県、広島県、岡山県、大阪府などから進学した学生も多くいました。その中の一人が繁永睦夫君（もう故人となりました）ですが、何人か友人もできました。



四国大学総合体育大会山岳部門

私は山岳部以外に教育学部の国語国文学研究会に所属しました。山岳部では数々の合宿山行をしましたね。あなたも参加したというのは、昭和三四（一九五九）年の四国大学総合体育大会徳島大会山岳部門なのでしょうか。私は二回生でした。（場所は剣山（一、九五五メートル）でした。当時の国鉄貞光駅で下車して参加したのを覚えています。）翌年が愛媛大会（大野ヶ原）だったのです。（写真参照）

山岳部では沢山の歌を唄いましたね。私たちの部では毎年歌集を作っていました。（写真参照）その中からいくつか拾い出してみます。部歌は『愛大山男の歌』です。節はもとほ広島が歌っていたと聞いた覚えがありますが、あるいは全国的に歌われていたのかもしれない。のちに芹洋子が歌って有名になった「坊ガツル讃歌」です。

一、同じ心のあこがれを
胸にいだきて行く君は



歌集表紙

学びの謎ぞ山男

愛媛大学山岳部

二、人皆花に酔う頃は

残雪恋いて山に行き

涙を流す山男

三、愛媛の山は低くとも

夏は故郷の山が待つ

岩をよずれば山男

無我を悟るはこの時ぞ

四、深山紅葉に片時雨

テント濡らして暮れて行く

心無き身ぞ山男

ものの哀れを知る時ぞ

五、町の乙女を想いつつ

尾根の処女雪けたてては

シユテムボーゲン山男

壮麗の気はいい難し

部室は、大学の正門（旧制松山

高等学校のもの）を入り、講堂（章

光堂 現愛大附属中学校登録有形

文化財）（写真参照）の前を通り

校舎を二棟ばかり横を進んで運動

場、プールの横にありました。旧

制松山高等学校の学生が歌ってい

たと思われる歌もその歌集に載っ



講堂（章光堂）

ており、私たちもよく歌っていました。

《三光寮歌（あ、南海の）》

一、あ、南海の夢の春

花の酒宴に屯して

今宵血気の若人が

歓喜の極み踊り舞う

二、疲れて眠る夜もすがら

数寝の花を蹴て立てば

緑酒琥珀の盃に

宿す千里の月の影

三、橄欖の花手折りてば

常闇破る暁を

希望に燃ゆる君と我

高き理想を語らなん

（六番まである）

《月砕け散る》

一、月砕け散る拓堤の

秋揺落に暮れゆけば

時の運命のわびしさに

眉濃みどりの若人よ

明日は別れの袖寒く

果無き旅に立ち出でん

二、温泉の町の森影に

草笛吹きてありし日の

行きて帰らぬ春秋の

流れ空しき世の姿

今別れては何時の日か

友と語らんすべもなし

三、命の楯に刻みたる

四年の名残り夢の跡

古城が丘に鐘鳴れば

胸血あふるる想

豊頬あわれ旅の子ら

若きこの日 ■ ■ ■ な ■

（■の部分）は紙が破れています。ご存知の方はご教示下さい）

《若葉の古城》

一、若葉の古城登りきて

空しくすぐる青春を

我が声低く誦する時

思いは遠き故郷の

美空に光る星七つ

啓示の色に牙ゆるかな

二、内海に咽ぶ満ち潮の

遠鳴り聞けばしみじみと

片帆悲しき漁舟

赤き夜泊の灯を恋うて

夜すがら叫び狂うてう

淋しき海鳥を偲びつつ

三、乱る花影類に受け

小胸に秘めし若き日の

憂を語る我が友が

指さす彼方南の

沈黙に煙る峯々は

五代が森か石鎚か

昭和三七（一九六二）年三月

二〇日卒業式。三月二七日出勤（松

本薬品株式会社）。教育学部の友

達は、それぞれ勤務校が決まり、

それぞれの任地に向かい出した。

同じ下宿の森岡秀介君の書き置

き。

「井手窪へ

長い間色々お世話になりました

た。この下宿を出ることは心残

りですが、いずれは出るべき所

でもありますので、出ます。

これからはあまり顔をつきあわ

すこともないでしょうが、今後ともよろしく。又、同じ道を生きる人間としてお互いに頑張りましょう。お元気で さようなら 秀介」

私は聴講生として大学に残り、

会社で働いていました。

そして、やっと同年九月に愛媛

県伊予郡上灘町立上灘中学校に勤

務できることになりました。松山をあと

にすることになりました。高校生

から数えると、約七年五ヶ月の松

山での生活でした。

さて、正岡子規はじめに書いたように夏目漱石との五十二日間の同居の後、松山を去ることになります。

十一人一人になりて秋の暮

三津浜乗船の前日一〇月一八

日、見送りに来た柳原極堂ら十人

の松風会員とにぎやかに別盃をく

みかわしました。夜ふけて一同が

名残りを惜しみつつ帰ってゆく

と、あとは子規ただ一人、秋の暮

れの淋しさがひしひしと胸にみな

ぎるのでした。

子規は途中奈良で遊んだ後東京

に帰ります。

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

明治三五（一九〇二）年九月

一九日未明東京上根岸にて寂。享

年三六歳でした。

（印）

791-3203 愛媛県伊予市中山町

出渕二一四五一

英訳「教行信証」と私の祈り

吉原 宏文
(昭四二卒)

私が敬愛してやまない愛媛大学名誉教授の溝口兢一先生から教わった、印象深い言葉が、耳の底に焼き付いている。即ち、「チェルノブイリ、福島等の原発事故は、人間が産み出した巨大技術が、制御不能になって招いた想定内の事態である、と、ドイツの哲学者・ハイデッガーが警告していました」と。

そして、現在、多くの国々で、次々と核爆弾や核兵器が製造され、人類と地球の存亡の危機が迫っている。昨年度のノーベル平和賞の光栄に与った、ICANの活躍により、核兵器禁止世界条約が発効した。しかし、広島、長崎と唯一の被爆国であるにもかか

わらず、我が日本国政府は頑固にそれを批准しようとしな。」「核の傘」に守られている現状では、「それは理想論である」、というの理解はできるが……

近年、人工知能(AI)、情報通信技術(IT)、また生命医学等の現代科学文明の長速の進展は、play God (遺伝子操作など、神のような振舞をする)の現実を引き起こしている。まさに、人類が神の領域に踏み込んだ感がある。

さて、昨年の冒頭から始まった、Covid-19の世界的流行病は、神を冒瀆し、欲望の資本主義の激闘、続発する内戦等の騒り高ぶった人間に対応した、神の逆襲ではな

いであろうか? 「教行信証」の中に、「欲界第六天の魔王、様々な悪鬼神の中でも特に力が強く、勢力が盛んな衆魔雄健天の存在」が述べられている(浄土真宗聖典一三八頁)。私は、これがコロナウィルスの正体ではないかと思う。

私は今、コロナ禍を怖れながらも、残り少なくなった後半生を、一日一日が勝負であると覚悟して、「教行信証」を学んでいる。どうか同窓生の皆様、そして将来、学校教育の現場に立たれるであろう現役学生の皆様、真の教育哲学(信念)を学ばれ、それを心の支えとして、明日の日本教育のために邁進されんことを祈っています。

さて、私は自分の思索を更に深めるために、英訳「教行信証」の編集責任者の一人、ニューヨーク州立大学教授、Mark L. Blum博士の序文を和訳してみたい。

この草分け的テキストに於いて、我々は、日本宗教の二人の偉大な知性、愚禿親鸞(一一七三-一二六二)と大拙鈴木(一八七〇-一九六六)の合流をみる。七世紀離れて生まれた二人の展望は、自ずから異なる。しかし、親鸞のテキストの鈴木を翻訳を読む者として、我々は彼のめがねを通して親鸞思想に近づく理解の軌道に入する。この二人の知性と読者である我々自身との出会いは、その要約した表題・「教行信証」として知られる原典をとおして連結される。多くの点で、この著作は、親鸞の代表作として、また、最高榮譽の偉業として評価されている。同時に、きわめて多作の鈴木もまた、この英訳は、その頂点に立つ。

「教行信証」は、正式には「顕浄土真実教行証文類」と呼ばれる。即ち、「真実の教え、行ない、そして浄土の悟りを顕らかにする原典的引用集」である。こ

れが、親鸞の教えの中核として明確に提示され、また、何世紀にも渡って集中的に研究されてきた聖典である。鈴木がその翻訳を完成したテキストでもある。親鸞がこの著作で、数十年に渡って改訂し書き直して苦闘したことを仄めかす多くの証拠がある。例えば、テキストにおいて、彼が記した唯一の日付けは一二二四年である。しかし、親鸞の自筆になる周知の板東本(版)は、一二三一年の前半から一二五〇年代後半にかけて日付けされている。国外追放の間から書き始めて、彼が一二三五年に京の都へ帰るときまで、彼の人生の後半にかけてこのテキストに、粘り強く取り組み続けた。彼の京都への帰還は、必要な参考文献を手に入れるために、仏教図書館への入場を許してもらいたい、ということが動機であったと推測する学者もいる。彼の他の著作の殆ど全て、「教行信証」の後に日付けされている。また、多くがこ

の著作に含まれているものの要約である。孰れにしても、「教行信証」は、親鸞が彼の宗教的展望を明確に説明する必要があるために、多くの紙面をとり、また、彼の見解を支持すると認められた文献なら何でも収集した著書である。そして、他の文献からの引用文の多くは、それらが例証していると思われるものに関して、説明が最小限になるように引用されている。「教行信証」は、実は、決して完結しなかった。そのことは、彼が正に、この著作に、生涯をかけて従事したことを暗示している。

大拙鈴木の、親鸞とその著作との関与は、はるばる彼の子ども時代にまで遡る。彼の母親は、伝統的真宗教義における念仏を異端的に解釈する秘密結社の敬虔な信奉者の一人であった。実際、鈴木は一九〇二年の初め頃、浄土教の教義について書き始めた。そして、一九一一年に「自力」と「他力」をテーマとする四冊の

随想を出版している。Japanese

Spiritualityと訳される「日本的霊性」という表題の彼の学術論文が、戦時中（一九四四年）、日本史を特徴づける中核となる宗教的主題の反映として書かれた。それは、全体的に、法然と親鸞の浄土教思想と関連している。大部分は「教行信証」を通して、親鸞の論調に特有の表現で探究されている。鈴木「教行信証」の翻訳は一九五九年を起点としている。彼がまだ、ニューヨークに居住していたとき、東本願寺（真宗大谷派）の公式の依頼に応じて始まった。そして、彼が日本に帰還し、北鎌倉の東慶寺近くの、今日、鈴木公文書を保管する松ヶ岡文庫と呼ばれる彼の書庫（書斎）で、本格的に翻訳に取り組んだ。一九六一年、即ち、九十一歳で、最初の翻訳草稿を東本願寺に送っている。その後、翻訳が調うまで、多くの修正や註が加えられた。竟に、鈴木

の死後（一九七三年）に東方仏教協会によって発刊された。教行信証」そのものは、古典中国語（漢文）で書かれた難解で複雑な専門書である。親鸞の最も詳細な解説的論文として、少なくとも十七世紀以来、真宗系の諸学校での履修課程の基礎学となっている。その形態は、教義、信仰、伝統の簡明な声明から成っており、また、経典、註釈、そしてそれらの論点を例証し、発展させ、正当化するため先師達によって書かれた評論を沢山引用している。その学体系的は、親鸞の先生である法然（一一三三―一二一八）によるこれまた有名な著作、「選択本願念仏集」（通例「選択集」と呼ぶ）を手本としている。この接近は、最初、道綽（五六二―六四五）による「安楽集」という浄土解釈の著作の研究に費やされた。そして、源信（九四二―一〇一七）の「往生要集」も追究している。我々は、ある程度、この特定の著作（即ち、「教行信証」）の骨格において教義の不安

定の度合いを推論することができ。そこで浄土の解釈学的立場を正当化するために力を発揮する「証拠となる文献」に大変多くの紙面を取っている。この点で、禅の典籍と伝統的浄土教の典籍とを比較してみると、両者は、比類なく、インド仏教には先例のない、六、七世紀に独自に生じた、中国仏教として発達したものである。それらは、その後、朝鮮と日本でも開花した。その中でも、伝統的浄土教思想にはるかに多くの文献を見出す。そして、法然と親鸞は、法然運動（専修念仏）の台頭に猛反発する張りつめた国家的状況に直面することとなった。その運動への迫害は、法然と親鸞に対する強制的国外追放という形で、同時に法然の四人の弟子の裁判と処刑など、親鸞の生涯を通して、当時の京の都や奈良等の学問的仏教の共同体からの深い疑念の不穏な表われであった。「選択集」

に先立つこと二世紀以上にもかかわらず、即ち、「往生要集」と他の天台浄土教の著作集との間の浄土信仰と修行において、法然は日本史にこれまでに見られたものとは全く異なった観念論的攻撃目標になった。ある意味で、これは十二、三世紀の仏教的聖職者たちの巨大な国家的勢力による猛撃であり、従来、全く実行されたことのない一人の高齢の僧侶に対して国外追放するという異端の主張になるものであった。別の観点から考察すると、法然と親鸞は、政治的に言えば、関連する修道会が、その事実を立証する必要があったことによつて、単に圧迫されただけでなく、もっと正確に言えば、人間と社会についての最有力な範例に挑戦した思考の道筋を強く主張したからである。

二〇二二（令和三年）

二月二十日（土）

731-0135 広島市安佐南区長束一丁目一八・一五

愛媛大学校友会からのお知らせ

愛媛大学校友会

をご存じですか？



愛媛大学校友会はすべての学部・垣根を越えて組織された団体で、同窓生をはじめ、学生及びその保護者、現職及び退職の教職員を会員として、平成16年に設立されました。

校友会は、①学生サークルへの援助 ②就職活動旅費の支援 ③留学渡航費の支援 ④学生図書への寄贈 ⑤入学生・卒業生への記念品贈呈 ⑥子規俳句カレンダーの作成 ⑦新社会人の歓迎会など、主に学生支援事業を行っています。

また、同窓生が主体となって組織された首都圏支部・近畿支部・中国支部では、講演会や懇親会を開催し、皆さんの参加をお待ちしています。

同窓生の皆さんは既に校友会員ですが、会員情報の登録がないと大学の近況や校友会報の送付、校友会イベントのご案内が出来ません。是非、下記により登録いただき、校友会活動にご参加くださいますようお願いいたします。

EUAA

Ehime University Alumni Association

〈愛媛大学校友会事務局〉 <http://koyu.ehime-u.jp/>

〒790-8577 松山市文京町3番 校友会館2F

Tel 089-927-8610 E-mail: office@koyu.ehime-u.jp

第12回愛媛大学ホームカミングデーについて

毎年11月の大学祭に併せて開催しております「第12回愛媛大学ホームカミングデー」につきましては、今後の新型コロナウイルスにおける県内外の感染状況を鑑みて開催を検討させていただきます。決まり次第、校友会ホームページでお知らせいたします。参加を楽しみにされている皆様には大変申し訳ございませんが、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方をお願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっております。

②二年ごとの更新は、煩いので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四
送り先 七九〇一八五七七

松山市文京町三
愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

払込取扱票		通常払込料金 加入者負担
02	016407	2754
愛媛大学教育学部同窓会		
☐ 同窓会懇親会会費 ☐ 会報送料 ☐ 寄付 () 年 卒		
振替口座番号 〇一六四〇一七二七五四 送り先 七九〇一八五七七 松山市文京町三 愛媛大学教育学部同窓会		

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒にありますのでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていません。前記の記載はしていません。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二一年十月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二一年六月十日（木）～

九月十四日（火）

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用し、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。



放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2021年度10月入学生募集中！
(2021年9月14日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp ☎ 0120-864-600

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。

愛媛大学ミュージアムから

愛媛大学ミュージアムは、只今（6月初旬）、「臨時休館中」となっていますが、いつでも開館できるよう、常に企画展等の準備は致しております。今後、県内の感染状況が落ち着き、本学の警戒レベルが引き下がれば、直ちに開館いたします。

開館情報は インターネットで『愛媛大学ミュージアム／愛媛大学』

 検索

又は ☎089-927-8293

ミュージアムでは、皆さんにコロナ禍の中、少しでも楽しんでいただくために昨年度から「展示を映像でご紹介！」シリーズとして、企画展の動画配信を随時行っています。よろしければアクセスしてみてください。

インターネットで『愛媛大学ミュージアム channel-YouTube』

 検索



令和3年度 支 部 長 会 報 告

今年度の支部長会は6月5日(土)に校友会館2階サロンにて開催予定でしたが、第4波の新型コロナウイルス感染拡大に伴い、理事及び支部長の安全を考え今年度も中止としました。予定していた議案は郵送による書面議決方式をとりました。

予定していた議案及び確認資料は下記の通りです。

【書面議決議案】

- 1号議案 令和3年度役員改選（案）
- 2号議案 令和3年度同窓会役員表（案）
- 3号議案 令和2年度事業報告
- 4号議案 令和2年度決算報告
- 5号議案 令和3年度事業計画（案）
- 6号議案 令和3年度予算書（案）
- 7号議案 令和3年度支部助成金（案）
- 8号議案 第18回教育学部同窓会懇親会（案）
- 9号議案 会報135号以降原稿担当予定（案）

【確認資料】

- 資料1 本部役員住所・連絡先
- 資料2 愛媛大学教育学部同窓会会則
- 資料3 支部活動支援金交付要綱及び様式

【書面議決結果報告】

各議案とも賛成多数で承認となりました。

【その他】

8号議案の「第18回教育学部同窓会懇親会」ですが、令和4年度での開催を含めて審議をしていただき、下記の開催期日が承認されました。今回は諸般の事情で初の日曜開催としております。また、今後の新型コロナウイルス感染状況によっては変更もあり得ますのでご了承のほどお願いいたします。詳細につきましては、会報133号でお知らせいたします。

第18回教育学部同窓会懇親会について

- 1 期 日 令和4年8月21日(日) 12:00～15:00 初の日曜開催
- 2 場 所 (交渉中)

令和3年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	小助川 元 太・奥 定 一 孝		監 事	尾 脇 康 資		事務局長	阿 部 修 一
	会 長	高 橋 治 郎			相 原 孝 裕			
	副 会 長	立 入 哉	山 下 雅 司	村 上 朋 子	菅 田 顕	渡 邊 恵 理		
部	理 事	青 野 多喜夫	長 野 照 道	山 本 千鶴子	満 田 泰 三	村 上 嘉 一		
		和 田 和 子	阿 部 晋	垂 水 葉 子	後 藤 陽 三	矢 野 裕 司		
		辻 井 芽美子	白 石 久美子					
		石 川 圭	吉 井 美 貴	玉 井 知津江	森 口 朝 子	吉 岡 舞		
		兵 頭 宜 彦						

県 内 支 部	支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	高 橋 竜 貴	金生第二小	越 村 慎 治	妻 鳥 小	篠 原 隆 輔	新宮小・中
	伊予三島	野 村 浩	三島東中	高 木 淳	寒 川 小	渡 部 振一郎	三島東中
	土 居	毛 利 雅 彦	小富士小	河 村 智恵美	長 津 小	高 橋 和 紀	土 居 小
	新 居 浜	中 野 久	中 萩 小	井 川 昭 二	垣 生 小	上 林 正 佳	別子小・中学校
	西 条	高 松 由香里	氷 見 小	田 口 孝 宣	西条北中	中 塚 葵	氷 見 小
	東予・周桑	木 原 敏 彦	国 安 小	岸 田 英 之	東予東中	千 羽 達 也	楠 河 小
	今 治	藤 原 勝 彦	清 水 小	亀 田 義 彦	立 花 小	山 口 峰 松	桜 井 小
	今治・越智	脇 阪 順 三	伯 方 小	藤 原 愛 明	上 浦 小	菅 征 永	宮 窪 小
	北 条	光 岡 葉 子	正 岡 小	宇 高 淑 文	立 岩 小		
	松 山	尾 脇 康 資	番 町 小	大久保 礼 子	余 土 小	正 岡 洋 介	城 西 中
	東 温	田 井 通 臣	南吉井小	松 本 祐 子	東 谷 小	森 本 久 美	北吉井小
	伊 予	山 下 吉 信	広 田 小	伊 達 泰 明	砥 部 小	久保田 貴 章	南山崎小
	上 浮 穴	段 王 繁 嘉	美 川 小	佐 藤 太	柳 谷 小	久 保 愛 彦	父二峰小
	大 洲	森 岡 也寸志	大洲東中	竹 本 親 由	喜 多 小	松 井 英 樹	長 浜 小
	喜 多	元 永 和 孝	石 畳 小	宮 部 修一郎	五十崎中	山 本 浩 史	天 神 小
	八 幡 浜	脇 坂 耕 三	喜須来小	河 野 靖	双 岩 小	井 上 武 彦	八 代 中
	西 宇 和	竹 上 正 也	伊 方 中	藤 堂 玄 人	大 久 小	大 石 友 紀	瀬 戸 中
	西 予	堀 内 良 之	田之筋小	岩 本 数 明	野 村 中		
	宇 和 島	山 崎 厚 弘	鶴 島 小	三 浦 克 文	二 名 小	武 内 和 也	岩 松 小
	北 宇 和	古 谷 孝	愛 治 小	高 田 宏 美	日 吉 中	酒 井 隆 仁	松野西小
	南 宇 和	若 松 隆 仁	長 月 小	清 水 美 和	久 良 小	井 上 武	城 辺 小
	附 属	石 川 圭	附属特支				

県外支部	東 京	成 見 由紀子	森 孝 枝	
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪	神 垣 鉄 雄		
	神 戸	平 山 昇		
	岡 山	春 名 貞 和	飯 綱 義 明	近 藤 立 志

編集委員	阿 部 晋	山 下 雅 司	矢 野 裕 司
	村 上 朋 子	阿 部 修 一	

→新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止（または書面議決方式による）

令和2年度 事業報告

令和3年度 事業計画(案)

4. 6 (月)	令和2年度入学式	学部生167名 院生29名 計196名
4. 10 (金)	第2回令和元年度会計監査	監査実施
5. 8 (金)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 23 (土)	第1回理事会	令和2年度本部役員案審議 令和元年度事業、決算報告 令和2年度事業計画案及び予算案審議 第17回同窓会懇親会案について審議
5. 30 (土)	同窓会懇親会世話人会	第17回教育学部同窓会について
6. 6 (土)	支部長会	令和2年度本部役員案審議 令和元年度事業、決算報告 令和2年度事業計画案及び予算案審議 第17回同窓会懇親会案について審議
6. 10 (水)	第1回編集委員会	会報130号校正
7. 1 (水)~3 (金)	同窓会報130号発行	会報発送作業 (8,000部)
7. 8 (水)	第2回編集委員会	会報131号の編集
7. 17 (金)	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
	支部活動支援金申込締め切り	各支部において教育学部名で後援・賛助できるもの
8. 1 (土)	第2回理事会	支部活動支援金及び書面決議結果審議
8. 22 (土)	第17回教育学部同窓会懇親会	会員相互の懇親会
11. 14 (土)	第11回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加
	第3回常任理事会	事業進捗状況及び懇親会について
11. (未)	学部サポーター制による講義	教育学部卒業生による講演
12. 18 (金)	第4回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 15 (金)	第3回編集委員会	会報131号校正
1. 23 (土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画案について
2. 1 (月)~3 (水)	同窓会報131号発行	会報発送作業 (8,000部)
3. 5 (金)	第5回常任理事会	令和2年度事業反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (水)	令和2年度卒業式	学部生171名 院生60名 計231名

4. 6 (火)	令和3年度入学式	学部生166名 院生32名 計198名
4. 14 (水)	令和2年度会計監査	監査実施
4. 21 (水)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 7 (金)	第1回編集委員会	会報132号編集
5. 15 (土)	第1回理事会	令和3年度本部役員案審議 令和2年度事業及び決算報告 令和3年度事業計画案及び予算案審議
6. 5 (土)	支部長会	令和3年度本部役員案審議 令和2年度事業及び決算報告 令和3年度事業計画案及び予算案審議 令和3年度支部助成金等確認
6. 16 (水)	第2回編集委員会	会報132号最終確認・校正
7. 1 (木)	同窓会報132号発行	会報発送作業 (8,000部)
7. 7 (水)	第3回編集委員会	会報133号の編集
7. 16 (金)	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
	支部活動支援金申込締め切り	各支部において教育学部名で後援・賛助できるもの
7. 31 (土)	第2回理事会	支部活動支援金及び後期事業報告
11. 13 (土)	第12回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加
	第3回常任理事会	事業進捗状況及び懇親会について
11. (未)	学部サポーター制による講義	教育学部卒業生による講演
12. 17 (金)	第4回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 19 (水)	第4回編集委員会	会報133号最終確認・校正
1. 29 (土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画案について
2. 1 (火)	同窓会報133号発行	会報発送作業 (8,000部)
3. 4 (金)	第5回常任理事会	令和3年度事業反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (木)	令和3年度卒業式	学部生 □ 名 院生 □ 名 計 □ 名

令和2年度 決算書

(収入の部)

(単位:円)

費 目	本年度予算	本年度収入	増 減	摘 要
1. 会 費	3,920,000	3,920,000	0	予定入会者 (196名) @20,000
2. 寄 付	220,000	219,000	△ 1,000	寄付金・送料等
3. 雑 収 入	20,000	11,000	△ 9,000	旅費返金・校友会補助等
4. 利 息 等	0	1,259	1,259	定期・普通預金等利息
5. 繰 越 金	636,251	636,251	0	
計	4,796,251	4,787,510	△ 8,741	

(支出の部)

費 目	本年度予算	本年度支出	増 減	摘 要
1. 会 議 費	150,000	44,751	105,249	支部長会・理事会
2. 旅 費	400,000	101,400	298,600	支部長会・理事会
3. 印 刷 費	1,350,000	1,217,260	132,740	会報年2回(封筒印刷含)
4. 通 信 費	350,000	324,425	25,575	会報発送、連絡費
5. 給 与 費	800,000	800,000	0	
6. 備 品 費	50,000	5,478	44,522	非接触体温計
7. 消耗品費	90,000	46,883	43,117	封筒、ラベル、コピー代等
8. 支部助成費	420,000	395,690	24,310	
9. 卒業記念費	350,000	343,035	6,965	電波時計付フォトスタンド
10. 国際交流基金	200,000	0	200,000	
11. 懇親会補助費	170,000	0	170,000	
12. 支部活動支援費	210,000	0	210,000	芸能・文化支援等
13. 学部活動支援費	100,000	0	100,000	学部サポーター活動支援等
14. 雑 費	56,251	21,063	35,188	
15. 予 備 費	100,000	52,260	47,740	事務手伝い謝礼等
計	4,796,251	3,352,245	1,444,006	
		残 高	1,435,265	(次年度への繰り越し)

令和3年度 予算書(案)

(収入の部)

(単位:円)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 費	3,960,000	3,920,000	40,000	本年度入会者 (198名) @20,000
2. 寄付・会報送料	150,000	220,000	△ 70,000	寄付金・会報送料等
3. 雑 収 入	20,000	20,000	0	校友会補助・利息等
4. 繰 越 金	1,435,265	636,251	799,014	
計	5,565,265	4,796,251	769,014	

(支出の部)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	150,000	150,000	0	支部長会・理事会等
2. 旅 費	400,000	400,000	0	支部長会・理事会等
3. 印 刷 費	1,350,000	1,350,000	0	会報年2回(封筒印刷込)
4. 通 信 費	350,000	350,000	0	会報発送・連絡費
5. 給 与 費	800,000	800,000	0	
6. 備 品 費	100,000	50,000	50,000	
7. 消耗品費	100,000	90,000	10,000	ラベル・封筒・コピー代等
8. 支部助成費	420,000	420,000	0	
9. 卒業記念費	350,000	350,000	0	
10. 国際交流基金	200,000	200,000	0	
11. 懇親会補助費	170,000	170,000	0	振込用紙・チラシ印刷代
12. 支部活動支援費	210,000	210,000	0	芸能・文化支援
13. 学部活動支援費	100,000	100,000	0	学部サポーター活動支援等
14. 雑 費	365,265	56,251	309,014	学生アルバイト謝礼 玄関環境整備費
15. 予 備 費	500,000	100,000	400,000	
計	5,565,265	4,796,251	769,014	

※△は減額を示す

愛媛大学教育学部同窓会会則

第1章 総則

第1条 (名称)

本会は、愛媛大学教育学部同窓会と称する。

第2条 (所在地)

本会は、事務局を松山市文京町3番地愛媛大学教育学部事務課内に置く。

第3条 (支部)

本会は、愛媛県下各郡市及び必要と認めるところに支部を置く。

第2章 目的及び事業

第4条 (目的)

本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする。

第5条 (事業)

本会は、目的達成のため次の事業を行う。

1 会員の親睦並びに教育振興に関する事業

2 会報発行に関する事業

3 母校の支援に関する事業

4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

第6条 (会員)

本会は、次の会員をもって組織する。

1 正会員

・愛媛師範学校(男・女)卒業生

・愛媛青年師範学校卒業生

・愛媛大学教育学部卒業生

・愛媛大学大学院教育学研究科等修了生

・母校の現職員及び旧職員

・愛媛大学教育学部在学生

・本学部卒業生外の大学院教育学研究科 在学生

第4章 役員

第7条 (役員)

本会には、次の役員を置く。

1 顧問 若干名 会長 1名 副会長 若干名

2 理事 若干名 常任理事 若干名

3 監事 2名

4 事務局長 1名

5 支部長 各支部 1名 副支部長 各支部 2名

6 支部幹事 会員在勤各学校 1名

第8条 (役員の選任)

1 顧問は、愛媛大学教育学部長及び同窓会長経験者を推す。

2 会長・副会長・監事は、総会において選任する。

第9条 (役員の任期)

会長・副会長・理事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。なお、任期途中で交代した場合は、前任者が残した任期とする。

第10条 (役員の任務)

1 顧問は本会の主要な事項について諮問に応ずる。

2 会長は、会務を総括する。

3 副会長は、会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。

4 常任理事は、常任理事会を組織し、本会の諸事業を企画立案し、理事会の議案に資する。

5 理事は、理事会を組織し、本会の主要事項について協議する。

6 監事は、本会の事業状況及び収支決算状況を監査する。

7 支部長は、各支部の会務を掌る。

第5章 会議

第11条 (総会) 総会は年1回開催し、支部長会をもって総会に代えることができる。

1 事業報告・決算書

2 事業計画・予算書

3 役員選出

4 本会の目的達成に必要な事項

第12条 (支部長会)

1 支部長会は、本会の目的達成に必要な事項について協議する。

2 支部長会は、会長が招集し、必要ときは臨時招集することができる。

3 支部長会の議長は、支部長の中から選出する。

第13条 (理事会)

1 理事会は、年3回(5月・8月・1月)開催し、常任理事会より提出された議案について協議する。

2 理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

3 理事会の議長は、会長が務める。

第14条 (常任理事会)

1 常任理事会は、年5回開催し、会則第5条に示された事業の企画立案をし、理事会の議案資料の作成にあたる。

2 常任理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

3 議案資料の作成は、事務局長がこれにあたる。

4 常任理事会の議長は、会長が務める。

第6章 会計

第15条 本会の経費は、会費及び寄付金等をもってこれにあてる。

第16条 本会の会費は、入学の際に納めるものとする。

第17条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第7章 会則変更

第18条 本会の会則を変更するときは、総会の決議を経なければならない。

附則

本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。

本会の運営上必要な内規は別に定める。

愛媛大学教育学部同窓会 支部活動支援金交付要綱

第1条

【目的】この要綱は、愛媛大学教育学部同窓会（以下「愛教同窓会」という。）会長が、「愛教同窓会」活動の振興と支部活動の活性化を図るため、各支部及び支部に属する会員が行う自主的な活動に対して、予算の範囲における支援金交付に必要な事項を定めるものとする。

第2条

【支援金申請者】本事業の申請者は、支部長とする。

第3条

【支援金対象事業及び支援額】本事業の対象となる事業活動及び支援金額は審査会（常任理事会）において審議する。

第4条

【支援金申請手続き】本事業支援金を受けようとする支部及び支部に属する会員は、「愛教同窓会」会長が定める期間内に、下記書類を「愛教同窓会」事務局に提出しなければならない。

(1) 支部活動申請書（様式第1号）
(2) その他、必要と認める添付書類

第5条

【支援金の交付決定】「愛教同窓会」会長は、前条の規定による申請を受理した場合、その内容をすみやかに審査し、常任理事会の意見を聞いて支援金の交付を決定するものとする。

「愛教同窓会」会長は、前項の規定により支援金の交付を決定したとき、すみやかにその旨を申請者に通知するものとする。

第6条

【支援金の交付請求】支援金の交付決定を受けた申請者は、すみやかに支援金交付請求書（様式第2号）を「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

第7条

【支援金の支払い】「愛教同窓会」会長は、申請者から交付請求書の提出があった場合、書類受理後常任理事会を経て交付する。

第8条

【活動実績報告および決算報告】支援金を受けた申請者は、支援事業の交付決定にかかる年度の11月30日までに、下記の書類を「愛

第9条

教同窓会」会長に提出しなければならない。
(1) 支部活動報告書（様式第3号）
(2) 会報掲載のための原稿（A4用紙1枚）
【交付の取り消しまたは返還】「愛教同窓会」会長は、次の各号いずれかに該当する場合は、交付決定の全部または一部を取り消し、支援金の全部または一部を返還させることができる。

第10条

(1) 支援金の交付申請に不正の事実があったとき
(2) 支援金を目的以外の用途に使用したとき
(3) 支援事業を中止したとき
(4) 支援事業を遂行する見込みがなくなったとき
(5) この要綱に違反したと認めるとき
(6) 実績額が支援金交付額に満たないとき
【その他】この要綱に定めるもののほか、支援金交付に関する必要な事項は、「愛教同窓会」会長が別に定める。

(様式第1号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金申請書					
支 部 名					
活 動 名					
活動予定日時					
参加員数 (予定数)	現 職 〇 人	人	その他 〇 人	人	総計 〇 人
支 部 の 活 動 目 的 ・ 内 容 (活動目的・内容をできるだけ簡潔に記入 ※詳細は計画書添付のこと)					
目 的					
経 費 内 容					
内 容	※大まかに記入後、実施計画書を添付				
予 算 書	※大まかな予算額を記入後、受けたい支援金額を記入 ※予算書添付のこと				
	※ただし、予算料込の金額とする。				
希望支援金(最大額を記入)	円				
本件連絡先	Email: dosokai.ed.uhime@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中)				

(様式第2号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金請求書				
活 動 名				
活動日時	年 月 日()	:	~	:
請 求 金 額				
一 金				
上記金額を支部支援金として請求いたします。				
代表者(担当責任者名) 印				
振込先	金融機関名	支店名	口座名	口座番号

(様式第3号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金報告書					
支 部 名					
活 動 名					
活動予定日時	年 月 日()	:	~	:	
参加員数 (予定数)	現 職 〇 人	人	その他 〇 人	人	総計 〇 人
報 告 内 容 (全体の様子や会員の様子を簡潔に記入)					
活動の様子					
金計報告	※大まかな費用と額を記入 ※詳細は決算書添付のこと ※収支報告は3ページ以下の添付で提出(※とれた3ページを裏に)				
本件連絡先	Email: dosokai.ed.uhime@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中)				

敬 弔

(物故会員)

(死亡年月日)	(氏 名)	(死亡年月日)	(氏 名)	(死亡年月日)	(氏 名)
2・4・27	村上 照子 (昭5・女師二)	3・1・19	竹田 敏行 (昭34・愛大)	3・3・12	後藤 博 (昭25・愛師)
2・7・28	高森 壽 (昭24・愛師研)	3・1・21	森山 賢二 (昭18・愛師一)	3・3・14	山田ミサト (昭16・女師二)
2・8・6	今井 昭三 (昭27・愛大)	3・1・27	眞田 熊雄 (昭26・青師)	3・3・17	金塚 坂雄 (昭34・愛大)
2・11・26	西谷 弘人 (昭24・愛師)	3・1・30	平野 孝明 (昭31・愛大)	3・3・18	井上 勲 (昭20・青師)
2・12・1	山本 正治 (昭23・愛師)	3・1・30	大野 憲 (昭17・県師二)	3・3・19	金子 進 (昭24・愛大)
2・12・17	岡田 勉 (昭25・愛師)	3・2・4	東澤 宏 (昭22・愛師)	3・3・23	菅 邦生 (昭32・愛大)
2・12・24	脇坂千鶴子 (昭29・愛大)	3・2・4	清水 悦子 (昭31・愛大)	3・4・7	金澤 俊朗 (昭26・愛師)
2・12・28	青木 公男 (昭36・愛大)	3・2・5	村上 楽美 (昭23・愛師女)	3・4・11	楠 貫一 (昭24・研究)
3・1・3	中村恵美香 (昭26・愛大)	3・2・9	中屋多喜男 (昭27・愛大)	3・4・19	小野久美子 (昭24・研究)
3・1・4	赤松 清子 (昭18・女師二)	3・2・17	岩井 昭 (昭26・愛大)	3・4・28	松本 利夫 (昭30・愛大)
3・1・9	越智 秀郎 (昭30・愛大)	3・2・17	上甲 正志 (昭22・愛師)	3・4・30	明石 昭英 (昭24・研究)
3・1・14	生田 仁道 (昭26・愛大)	3・2・20	光田 比公 (昭22・愛師)	3・6・2	松岡 好雄 (昭25・青師)
3・1・16	白石 昭子 (昭40・愛大)	3・3・7	浮穴 功 (昭28・愛大)		

寄付者名

令和3年1月～6月

森 正徳様
菊 澤 康様

※同窓会へのご寄附ありがとうございました。

祝・叙 勲

(令和三年四月二十九日)

春の叙勲
☆瑞宝双光章

教育功労

高橋 猛 殿

松山市北土居二二八―五一

(昭和四十九年卒)

教育功労

渡部 清 殿

松山市味酒町三十一―一

(昭和四十八年卒)

会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写真を事務局にお送りください。



【渡り蝶】

我が家には、9月下旬から10月下旬にかけて渡り蝶が飛来します。庭の藤袴の花から発するクマリンという香料を求めてやって来ます。1日～2日して南の国へ旅立ちます。

主に浅黄斑蝶（アサギマダラ蝶）（写真①）ですが、珍しく石垣蝶（写真②）が飛来しました。2018年10月13日のことです。そして、2020年10月7日マーキングされたアサギマダラ蝶が飛来（写真③）。いつ・どこで・だれがマーキングして放ったか、情報交換により飛行ルートや日数などが分かります。さて、今年はどんな珍客（蝶）が来るか……

写真提供 坂井喜多夫（昭和41年卒）



文芸欄

【三原色を使って－パートⅡ－】

原色（赤、青、黄）と白だけを使って、自分の色を作って描いた水彩画です。手の届きそうもない高みではなく、生活のすぐそばにある「ゲージュツ」を志向して活動しています。コロナ禍の時代、失いがちな優しさとか自由ですが、絵を描くことで少し補充出来ているかもしれません。

原画提供 安井明美（昭和48年卒）

